

義民道南傳

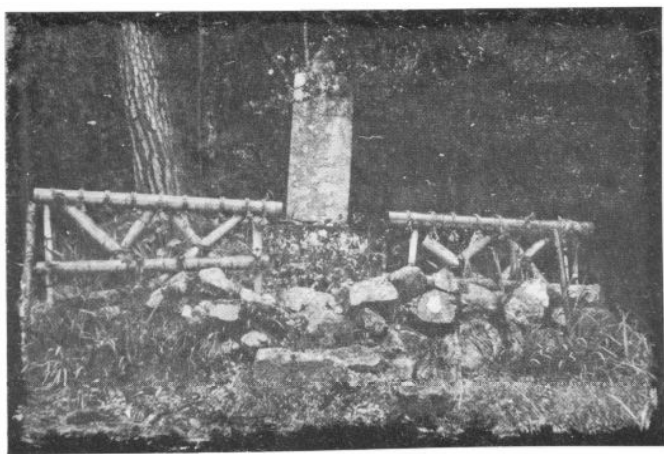


表題  
紙字

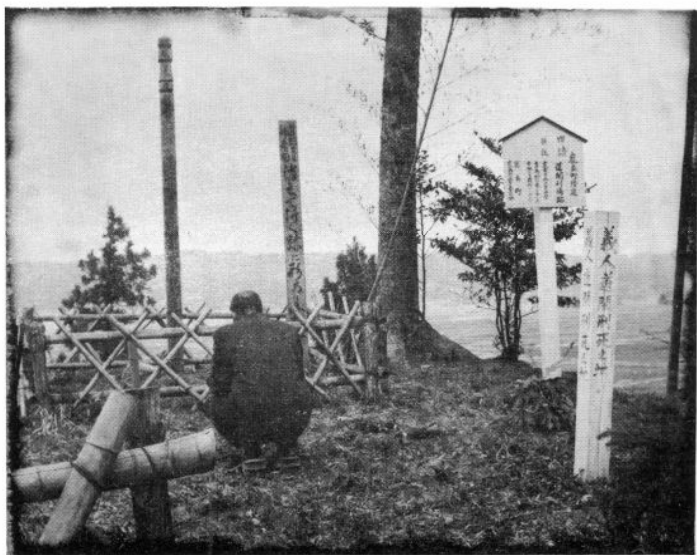
若山  
林田  
賢宗  
子次

義民道閑傳

若林喜三郎



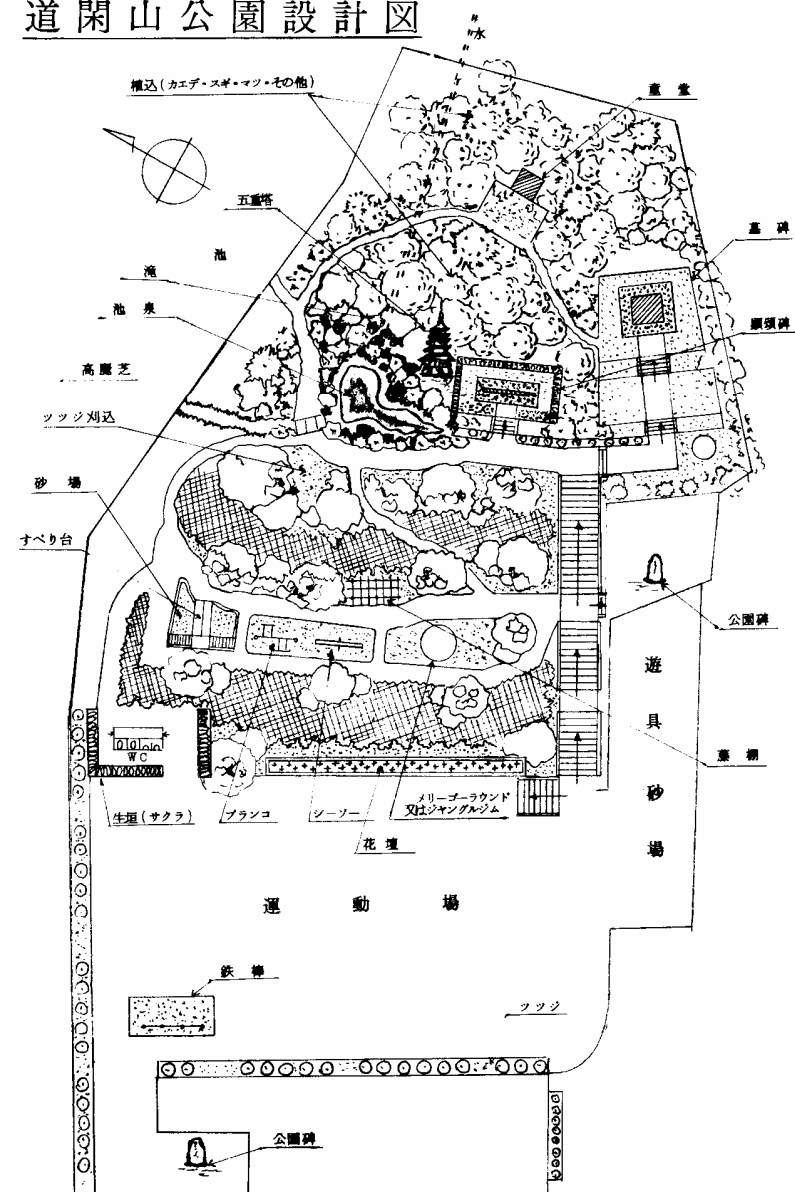
道 閑 の 墓



道 閑 刑 場 跡



# 道閑山公園設計図



## 刊行にあたって

本年は、郷土の生んだ義民道閑の三百回忌にあたりますので、その顕彰のために、いろいろな事業を予定しておりますが、その一つとして、「義民道閑伝」を編集、公布することとなりました。

きびしく農民を抑圧し、苛斂誅求をこととした封建時代に、身を挺して検地反対の先頭に立ち、そのため悲惨な最後をとげた道閑に対する追慕の情は、戦後の今日といえども、いささかも衰えておりません。それは、「七十五村の身代りに」とうたわれましたように、単に久江区民だけに止まらず、鹿西地区全般にわたる住民諸氏も同様でありました。このことは、今回の事業の推進にあたってよせられました御熱心な応援をみても、明らかであります。本書は、それにこたえて世に出ることとなったのであります。

ところで、従来の道閑伝は、時代が古いのと、事柄の性格とから、とかく伝説と史実とのけじめがつかないという状態でありました。そこで、この区別をはっきりさせて、ほんとうのすがたをできるだけわれわれのわかるようにしてほしい、という区民の要望から、編集のすべてを金沢大学の若林喜三郎先生に御依頼したのであります。幸いにして、先生は「鹿島町史」編集のため御尽力下さったことでもあり、御多忙中にもかかわらず、ころよくひきうけて頂きまして、このように立派な「義民道閑伝」が完成されたのであります。

また、これとともに、小倉学先生から、道閑とゆかりの深い久氏比古神社と道閑祭について、貴重な御研究を寄せて頂き、記念事業の概要とともに、本書の附録として掲載することができました。両先生に深く感謝申し上げます。

本書の成立にあたりましては、区民各位の熱心な御後援をえました。また、資料収集に協力されました堅田悌二先生、印刷にあたって献身的に奉仕されました林秀雄氏にも、あわせて深甚なる謝意を表します。

昭和四十二年二月

道閑三百年記念事業委員会

委員長 山田 宗次

## まえがき

義民道閑に関する伝記の執筆を依頼されたのは、「鹿島町史」の編集集中であった。

元来、道閑に関する基本史料は、長家や前田家で編集した記録が主なもので、それも、浦野事件に集中しているため、道閑一件は副産物的な取り扱いをうけ、かなり粗漏である。また、地もとの久江に少しでも史料が残っていないかと期待していたが、なにぶん早い時期の処刑者のことであるから、関係文書類は全然見出せず、さらに伝承をたずねてみても、おおかた「石川県鹿島郡誌」に収録されているもので新たにそれに加えるほどのものでもなかった。それでも、道閑に孫があったという新史料を得たことや、鹿島町史の史料収集中に、道閑の子孫九左衛門の活躍をかたる史料を発見したことなどは、大きな収穫であった。

こうした条件の下で、史実と伝説とをはっきりより分けること、そして、その上で道閑事件が、歴史上どのような位置を占めるものであるか、ということ明らかにする仕事をこの機会にやってみようと考えた。たとえそれが、道閑に関する区民の皆さんのイメージを破る、という結果となろうとも、そうすることが道閑の事蹟を顕彰する事業としては、もっとも有意義であると信じたからである。道閑事件を純粹な百姓一揆とするには、長家の内訌、浦野一党の私曲、加賀藩の領土政策、とあまりにもそれをおおい包む要素が多過ぎるようである。しかし、それでも、道閑は敬慕すべき百姓一揆の犠牲者であり、しかも、加能義民の第一号として、顕彰すべき人物である、と主張する自信だけではきたとおもう。

さらにまた、本書を手にとる人のために文章を平俗に、内容もわかりやすくする必要があった。そのため文書の引用はできるだけさしひかえ、敘述も、まず久江の自然と沿革、次に長家のこと、浦野

のこと、さらに十村・村役人や、ひいては藩農政の基本的性格の解説にまで及ばねばならず、そのため肝腎の道関一件の記述は薄手のものとならざるをえなかった。しかし、そのことは、かえって道関そのものを浮きぼりにする効果があったし、同時に久江区の小史としての思わぬ効果も生まれたと信じている。

この点、小倉學氏が、付録として式内社久比古神社と道関祭について、貴重な解説をよせられたことは、本書に非常な深さを与えたものとして、まことによろこばしいことであった。附録二の道関三百年祭記念事業の概要とくらべあわせると、道関に対する追慕・顕彰のしかたにも今昔の相違がみとめられて、まことに興味の深いものがある。

昭和四十二年二月

金沢大学教育学部歴史研究室にて

若 林 喜 三 郎

# 目次

刊行にあたって

まえがき

一	久江区の沿革と精神的風土	一
二	長家領鹿島半郡と十村	五
三	いわゆる浦野事件（道閑事件）	一一
四	道閑の活躍	一六
五	道閑の処刑	二六
六	半郡接收と改作法施行	三六
七	道閑に対する追慕	四二
八	加能義民第一号	五四

附録一 久成比古神社と道閑祭

同 二 道閑三百年祭記念事業の概要

## 一 久江区の沿革と精神的風土

久江という地名は、古語のくゑ（崩れるという意）から起こっている。土地が崩れる——つまり地すべりという現象は、久江の住民の歴史とともにあったということができよう。

能登は、一帯に地すべりの多い地方であるが、最近でもしばしば話題になるのは、石動山系に属する山地で、能登側も越中側も、この災害は宿命的ともいえるのである。先年の氷見市胡桃原くるみはらの被害は、全国に知られたニュースであった。久江もその一例で、明治三十七年（一九〇四）の久江原山分の大被害は、今や故老の語りぐさとなっているが、昭和四十一年のそれは、記憶も新たなところである。

水源が荒山ならば川も荒川である。濁川にごりなどは、その名からして濁っているように、こうした地域の河川は、土砂の運搬がさかんで、下流地方での堆積も旺盛である。土砂の堆積が旺盛とあれば、湿地を埋めて、耕地として開いてゆくことを可能にする筈であった。

天は二物を与えずというが、また、同時に損害ばかりを与えもしない。このあたり



の歴史は邑知潟周辺の湿地を開いて、耕地と住地をつくるための努力の継続であったともいえる。もちろん、久江もその一つであった。

古代中世の  
久江

では、この久江にいつ頃から人が住みはじめたものか、ということになると、考古時代の遺跡・遺物がそう沢山はないので、明らかにすることはできない。僅かに山手の段丘にジンノアナ（陣穴）と称する横穴古墳があるので、六・七世紀の頃、このあたりには、すでに集落があったと考えられる。

また、延喜式にのせられた久氏比古神社くでひこの存在も大切で、延喜式は平安時代の延長五年（九二七）に完成されたものであるから、位置は多少移動したとしても、少くともその当時には知られていた古社であるということができ、その附近に人里があったと考えてよいのである。

次に、鎌倉時代に入ると、承久三年（一二二二）の「能登国田数目録」に、

久江保 七町三反二 本四丁九反三 建保五年検注田定

とあり、この地は久江保と称する荘園の一つで、建保五年（一二二七）の調べでは、四町九反余となっていたのである。

さらに、室町末期、文明十八年（一四八六）にこの地を巡遊した道興じゅうこう准后（青蓮院

門跡)の「廻国雜記」によると、

くゑのやちという所にてよめる

心からうきすまひにも馴ぬらん八千たび何をくゑの里人

とある。やちとは谷内のことで、文字通り山手の谷間の地域をいう。すなわち、現在でも久江川を挟んだ山手の地域を谷内と呼んでいるのであるが、すでに五百年のむかし、道興准后のような都会人の目には、「うきすまひ」と映じながら、「くゑの里人」が住んでいたのである。鎌倉時代の久江保というのも、おそらくこの地域であったのであろう。

近世以後の  
久江

こうした間にも、久江川の堆積作用と土地の隆起とを利し、どんどん下流地方が開拓され、その方向に向って集落も発達したらしい。地名をさぐってみても、谷内から高出、さらに奥出と戸数が延びて行ったようすを示している。「ところやちの道閑さま」とうたわれたように、久氏古神社に近い谷内の好地に居を構えた道閑が、いつの頃にか長連頼から奥出に方百間の万兵衛屋敷を下賜されたと伝えられているのも、そのまま久江村の発達を反映しているといえるであろう。

これらについては後章で再説したいと思うが、江戸時代には、延宝頃千九百七十九

石余、文化頃千六百五十三石余という近郷きつての大村で、百五十軒を越える戸数をもっていた。そして、その後の久江の歴史は、自然のきびしい脅威に磨きあげられた団結心と、ゆたかな恩恵によって培われた経済力とを背景とする独立独歩の行動をもって特色づけられている。

たとえば、明治二十二年（一八八九）施行の町村制により、一旦滝尾村に属しながら二十六年二月に分離し、また戦後の町村合併法によって、昭和三十年鹿島町が成立してからも、同三十二年五月まで、分村を主張して果敢にたたかい続けたのであった。こうした村民の行動は、あるいは時代逆行のそしりもあるかも知れないが、その一面、自由・独立への要求の強さも汲みとられよう。

今を去ること三百年、久江村の道閑が長家領鹿島半郡五十九カ村の代表として検地反対運動を指導したということは、今日という自由・独立などという觀念とは程遠いものであるが、強権に屈しない果敢な行動という点では、共通のものがあつて、それが久江村民の伝統であるといえはいい過ぎであろうか。少くとも、道閑をしのび、その業績を顕彰するということは、久江の精神的風土ともいふべき自由・独立の根性を培養するという意図をもつことによつて、はじめて意義があると考えられる。

## 二 長家領鹿島半郡と十村

長家領の由来

まず、長家の由来について述べておこう。長氏は、旧姓長谷部氏で、文治二年（一一八六）に源頼朝より能登の地頭に補せられた長谷部信連を祖とする。室町時代には、守護島山氏の臣となり、その家も多くの分流を生じたが、天正八年（一五八〇）に織田信長から鹿島半郡を与えられた長連竜は、その主流であった。

連竜の父長統連、および兄綱連が叛臣遊佐統光らのために謀殺され、上杉謙信の七尾城攻略が成就したのは天正五年であったが、当時連竜は織田信長に援軍を乞うため留守中であつた。そして連竜は、主家および父兄の仇を報ずるため信長軍の進発に先立って能登に帰り、遊佐・温井らの叛軍と各地に転戦したのである。彼が信長から鹿島半郡を与えられたのは、その功によつたもので、天正九年に能登一国が前田利家に与えられてからも、ここだけは長家領として伝領されたのは、こうした由来に基いたものであつた。

鹿島半郡の知行方式

鹿島半郡というのは、鹿島郡の西南部で、二宮川をもって前田領との境とする。村数は五十九カ村で、石高は一万一千石であつた。そして、この地は、連竜が利家の家

臣となつてからも（初めは單に戦斗組織としての与力であつた）、右のような伝領を続けていたが、これは前田氏の家臣としては異例であつた。

というのは、利家は多くの家臣に知行所を分散して与えるという方針をとつていたので、このように家臣の知行所が一カ所に固まつてゐるということとはなかつたのである。当然家臣たちには知行所に住むことを許さず、租税徴取の際にのみ下代や代官を派遣するというやり方であつたのに対し、長家領半郡には、田鶴浜に長氏の本処がおかれ、徳丸には御旅屋たやがおかれる、というふうに、独立大名扱いをうけていたのであつた。

そればかりではない。長家領半郡には、長氏の家来たちが大勢現地住まいをしており、下人らを使役して田畑の耕作までやらせるといふ、まるで中世の地方武士のような方式が、そのまま残されていたので、こういう方式を地方知行じかたちぎようといふ。つまり、ここだけは、前田領内でありながら、前田氏の知行方式とは全然異つた、半独立国のような状態であつたのである。

十村とは何か

道関が十村とむらであつた、といふところから、次に十村とは何かといふことを述べておこう。これは、一カ村を支配する村肝煎ではなく、数十カ村を支配する大庄屋の類で、

最初は十カ村ぐらゐのものであったから、十村肝煎と呼んでいたのを、寛永頃から支配の村数が増加したところから、ただ十村と称するようになったのである。

この制度は、加賀藩では二代藩主前田利長の晩年、慶長九年（一六〇四）に創始されたということに諸説が一致しているようであるが、そもそも前田利家が天正九年（一五八一）能登に入部して以来、地域地域の地侍級の豪農に扶持を与えて手なづけていたことから始まっていたと考えられる。利家は、能登や加賀からは、ほとんど地侍を家臣に編入しない方針であった。能登では長氏は別として、主だった畠山氏の遺臣はみな減ぼしてしまったし、加賀では一向一揆の首領たちは、大方討伐されてしまっていたので、家臣として吸いあげるような地侍は、すでに存在しなかったせいもあって、これら小土豪を土着の扶持百姓として優遇しながら、藩制草創期の末端機構として利用したのであった。

利家は、やがて天正十一年（一五八三）の豊臣秀吉の柴田征伐に加担して加賀に進出、居城も七尾から金沢に移した。また、その子利長は慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦には徳川家康にくみして、その結果、加越能三州で百二十万石の大大名となったのであるが、中世末、「百姓の持ちたる国」（蓮如上人のことば）といわれた程の



一揆国を、完全に掌握・支配することに成功したのは、一に前述のように土着の豪農層を手なづけ、地方支配の末端機構とすることに成功したからで、それを制度化したのが、十村制であったということが出来る。

長家領の十村

長家領鹿島半郡では、前述の通り加賀藩とは異なった地方知行の方式をとっていたが、地方の支配には藩にならって十村制をとっていたらしい。但し、藩制とは違って、最初は侍を十村としていたが、慶安三年（一六五〇）には次のような百姓十村の名があらわれている。

笠師村	伊勢	（組下一〇カ村）
能登部村	上野	（同 一三カ村）
高田村	二郎兵衛	（同 一二カ村）
三階村	池島	（同 一三カ村）
久江村	道閑	（同 一六カ村）

（注） カッコ内は明暦二年（一六五六）の村数で、計六十四カ村となる。

ついでに、浦野事件当時、すなわち寛文六年（一六六六）頃の十村名をみると、笠師村は伊勢に代って太左衛門となっており、久江村道閑が筆頭の十村頭をつとめてい

たようである。

ところで、長連竜は鹿島半郡で一万一千石、ほかに加賀で一千石を与えられていたが、その子好連が能登で一千石を与えられたので、長家は計三万三千石を領していた。しかるに、好連は慶長十六年（一六六一）に三十歳の若さで死去したが、次子の連頼がまだ幼若であったので、連竜が再び当主となり、慶長・元和の大坂役にも出陣した。そして、元和五年（一六一九）連竜が死亡したため、連頼がその遺領三万三千石を領することとなったのである。

先述の通り、長連竜は織田信長の家臣として半郡を与えられ、前田利家の与力であったが、のちその家臣となったものである。長家はのちに本多・横山・両奥村・両前田・村井らとともに、八家と呼ばれる重臣となるのであるが、当時はまだ外様の破格的存在であった。剛毅をもって聞えた三代利常が、慶安四年（一六五一）から明暦二年（一六五六）にかけて、改作法と称する農政大改革を行なった際にも半郡だけは手をつけることができなかった。したがって、それを接収して、他の家臣並みの取扱いにするのは藩としての永い間の懸案であった。そして、その好機となったのが、五代綱紀の寛文年間に起った浦野事件であったのである。

$\overline{O}$ 

連 網  
竜 連

「連竜」

好連

「連賴

元連

房連

尚連（千松）

### 三 いわゆる浦野事件（道閑事件）

浦野孫右衛門は、長氏歴代の功臣で七百石を喰んでいたが、常に現地の田鶴浜に居住し、その子浦野兵庫・阿岸掃部かきんその他の侍を傘下に集めて固い族团的徒党を結び、隠田を拓いて私するとの風評が高かった。これに対し、金沢の連頼の側近にいた加藤采女うめ一派は、ことごとくに浦野一党とは反目していたのである。

先代の浦野孫右衛門は、連頼を当主と定めたときの功勞者であったが、寛永十一年（一六三四）連頼が親任した權臣高田内匠たくみのざん言のために改易され、伊予侯松平定行に仕えた。このとき、加藤采女の先代はこれを苦慮し、連頼に直諫して内匠を追放するとともに、二代目孫右衛門の復歸に尽力したのである。すなわち、浦野・加藤両家の先代は、協力して長連頼の危機を救った功臣であったのであるが、その子の代となるに至って、しだいに対立するようになったのは、長家にとって大きな不運といわねばならなかった。

というのは、前にも述べたように、鹿島半郡の接收は加賀藩の懸案であったのである。その機会がねらわれていたのである。もし、先祖伝来の遺領をそのまま保持しよ

## 新開検地

うとすれば、二大支柱ともいふべき浦野・加藤が、先代にならって固く協力すべきであつたにもかかわらず、事實はこういう状態であつた。

やがて、寛文五年（一六六五）連頼は新開検地を申し渡し、三月二日酒井村より竿入れをはじめ、金丸村に及んだ。しかし、農繁期にかかったので一旦中止し、九月二十四日に、曾根村から再開した。

検地というのは、文字通り土地を検査することで、その広狭から收穫高までしらべあげるのである。検地奉行が出張し、その監視のもとに一定の竿をもって測量してゆくのであるから、しばしば打出しといって收穫高が高く見つもられることとなり、また隠田や余田が摘出され、それによってようやく重い租税に耐えていた農民をひじょうに苦しませる結果となるのである。

だから、検地ということは農民の恐怖と反感を買いやすいので、余りしばしば行ふべきものでなかつたのであるが、このときは、浦野らの悪事をあばくため、新開分だけの検地を行おうとしたのである。もちろん、これは反浦野派の加藤采女らの画策によつて施行されたのであつた。

浦野一党の  
対捍

果然、浦野一党は反撃に出た。翌六年三月、その一門一党二十三人が家にこもり、

起請文（神仏の威をかり、決して違反しないと誓約した文書）を書いて結束を誓った。そして、もし主君から暇を出されたらそのまま退去せず、平素から遺恨のある反対派の連中を殺害し、その下屋敷に放火してやるぞ、と公言し、武器を備えて威かくするに至った。

そればかりではない。彼らは翌七年正月、半郡の十村らを扇動し、検地中止の運動を起こさせた。このため世情騒然、半郡一帯收拾することのできない大混乱におちいったのである。

しかも、当主連頼はすこぶる凡庸で、このような事態を独自の裁量で処理することができず、七年閏二月に至って浦野らの暴状を藩の重臣に訴えたところから、ままと藩の術中にはまりこむ結果となったのである。すなわち、藩当局の長家に対する内政干渉の好機を与えたのであった。一説には、藩の重臣横山英盛が、親交のあった浦野孫右衛門をそそのかして、騒動をおこさせたのであるともいわれている。

その事実とはもあれ、これは一種の高等政策によるもので、この裏面に、藩の黒い手がうごいていたということは、充分に考えられることである。

時の藩主綱紀は後世松雲公と称せられ、よく祖父利常の遺業をひきつぎ、加賀藩制



をつくりあげた名君であつたが、当時年令はいまだ二十五歳の青年で、夫人の父保科正之の指示をうけて、厳格な処分を行なつた。

すなわち同年三月、藩は足輕百五十人余を派遣して一味徒党及び百姓に至るまで、関係者をことごとく逮捕させ、金沢に送つて断罪した。

まず、首領格の浦野孫右衛門・浦野兵庫・阿岸掃部・駒沢金右衛門・宇留地平八は切腹、及びその男子たちは二歳の赤ん坊に至るまで殺害された。これに連坐して、流刑・追放・改易（とりつぶし）に処せられたものは三十人に及んだという。十村らもそれぞれ処刑されたが、それは次節で述べることとする。

また、長家に対しては、先祖連竜の功績に免じて改易、または減封という処置をせず、いちおう半郡領有も認められた。しかし、今度の騒動にあたつて連頼の子元連の行為がよろしくなかつたとあつて剃髪・蟄居させ、その子千松を相続人とすることに決めた。これが後の尚連<sup>ひまら</sup>で、このとき六歳であつた。

浦野征伐を目的とした新開検地はただちに中止されたが、以後の検地はすべて藩の検地条例にしたがうこと、奉行・役人の任命もまた藩の承認を得ることなど、まず農政の部門から、藩の強力な指揮権を導入するしくみとなつたのである。

おもうに、この事件は一つの御家騒動とみられる。すなわち、当主連頼・元連父子の間には、何か感情的な対立があったようであり、浦野派は加藤派との抗争から、元連に接近した形跡がある。どちらかといえば、初期的御家騒動によくみられるタイプであった。

一説に、浦野一党のねらいは、この騒動によって連頼を隠居に追いこみ、元連を相続させた後に、その権力によって加藤采女一派をしりぞけようとしたものであったといわれるが、あながち仮空の説でもなかったようである（石川県史・第二編、四七九頁）。

## 四 道 閑 の 活 躍

道閑の出自

ここで、やっと農民側の立役者たる十村道閑についてかたる順番となった。まず、道閑家の由緒について、「石川県鹿島郡誌」によれば、

園田家の祖は河内国かわちの人なりしが故ありて能州に來り、久江村に住す。而して村人に物教へなどせりと。其の子孫に至り十村肝煎となり、良剛様（連頼）より方百間四方の屋敷を賜りし事あり、次で道閑の世に至り長家領十村五人の頭役となり勢威ありしも（下略）

とある（三一三頁）。

しかし、現在これを証明すべき史料もなく、出自などについては一切不明で、河内（大阪府）から来た、といっても何時頃移住したものかはわからない。その宗旨が他の百姓と違って真言宗であることなども、移住者らしい特色を示していると思われる。その旦那寺たる能登部の長樂寺には道閑家の墓があるが、代々の墓か文化十三年（一八一六）に十村市樂が建てたものかは不明である。同寺の過去帳によると、寛文元年（一六六一）十月七日に道閑の父が死去しているが、その法号は「久宝賢喜居士」と

あり、これだけの史料で推測するのはいささか早計であるが、父はこのあたりに類例の多い侍牢人の帰農したものか、とも思われる。



道閑家の墓。能登部長楽寺の墓山に久江の方に向けて立てられている。

道閑屋敷のあった谷内というのは、久江川を狭んだ山手の地域で、久江としては、早く開けたところである。現在の久氏比古神社の東南地区にダイシと称するところがあり、ここに道閑の屋敷神がまつられていたと想像されるから、このあたりから道閑の墓所のあたりにかけて、その屋敷があったのではあるまいか。近くは真館の武部家、遠くは町野の時国家、浦上の泉家など、十村級の旧家が、全く類似の地形に居を占めていることと思えば、おおよその推定は可能と思われる。

ついでながら、久江には谷内兵衛という旧家の大百姓がいた。諏訪藤馬氏は久氏比古神社のオケラ餅の神事に、道閑組と谷内兵衛組の二組に分かれて競うところから、

谷内兵衛は久江村の肝煎で、浦野事件当時十村道閑に反対した名ごりではないか、という私見を出しておられたが、それならば、事件落着後谷内兵衛は藩より最高の恩賞をうけ、十村にでも任命されそうなるものであるのに当時の肝煎は佐藤左衛門であり、全然その名が出ないのはどういうわけなのであるうか。

(注) 諏訪藤馬氏の説は、「石川県鹿島郡誌」所収の「諏訪文書」による。以下同じ。

万兵衛屋敷  
と兼農経営

次に方百間の屋敷というのは、同書によれば、小字裏出にあり、道閑表道より裏道まで百間四方、長連頼よりたまはりしもの、今其の邸址に二十四戸の民家あり、道閑処刑後持高三百石と共に没収の上酒井万兵衛に賜はる、称して万兵衛屋敷といふ。童謡あり、「たかで極楽うらでは地獄万兵衛屋敷に鬼が出る」。

とあるのがそれである(三一二頁)。裏出に屋敷を与えられたということは、何を意味するのであるうか。

それについて、まず道閑の農業経営の規模を考察してみよう。道閑の持高は三百石とうたわれているが、実高は四百十六俵余という記録がある(郡誌、一三四頁)。し

かるに、寛永五年（一六二八）の「上野組半郡人別帳」によると、十村上野の持高は八十三俵とあるが、実高は二百二十三俵余、つまり、道閑の約半高ということになる。

万兵衛屋敷跡。久江川の標柱の向うあたりと推定される。

そして、その経営の労働構成は、脇の者五人、地の者四人、下人五人、計十四人の隷属農民をひきい、ほかにあぜち（隠居分家）一人とそのあぜち二人が隷属している。その上上野は馬四疋、牛一疋をもち、これら隷属農民のもつ八疋とあわせて十三疋ということとなり、上野はこれらを駆使して粗放な豪農経営をやっていたのである。

道閑は、およそこの二倍の労働力をもつ豪農経営者であった。長楽寺の過去帳に、承応四年（一六五五）二月十九日に久江村道閑の家来（隷属農民のこと）の死去を記すほか、久江村何某の登記が散見するが、おそらくこうした道閑の隷属農民が縁辺者であろう。

ところで、道閑が方百間の屋敷を領主から拝領したというのは、こうした労働力によって、この地区の新田開発に目ざましい働きを示し、その功を費せられたためとい



当時の十村というのは、およそこういうオヤカトの豪農で、おおいに近隣に威を張るとともに組下村々の治安維持、勸農や租税完納の責任者でもあった。

そこで、いまその五十九カ村をあげてみると次の如くである。

酒井 四柳 大町 小金森 高畠 福田 藤井 小田中 久江 小竹 水白 井田  
芹川 徳前 鹿島路 金丸 金丸出 上曾根 下曾根 能登部下 徳丸 上 良川  
東馬場 西馬場 最勝溝 黒氏 一青 末坂 羽坂 春木 大槻 瀬戸 花見月  
三階 町屋 温井 伊久留 下 杉森 高田 田鶴浜 川尻 新屋 垣吉 吉田  
七原 三引 白浜 深見 大津 塩津 笠師 筆染 奥吉田 河崎 豊田 豊田町  
土川

明暦二年（一六五六）には、前述の通り六十四カ村となり、右に荻谷内・後山・満仁・尾崎・浅井の五カ村が加わっている。

これらの村の一つ一つはおよそ現在の大字にあたるのであるが、中にはさらに小さな村落に区分されるところもあった。これを垣内（かくち小字）といったのであるが、それらをもかぞえて、七十五村と称した場合もあった。そして、浦野事件当時は、久江村の道開が十村頭として、他の十村たちを監督する地位にあったのである。

#### 肝煎と組合頭

ここで、ついでに村々の村役人について述べておこう。これは、地方により名称が異なり、その首長を関西地方では大たい庄屋、関東では名主といった。また、その補佐役を組頭・長百姓などと称したが、加賀藩では、これを肝煎・組合頭と称したので、この点は長家領でも変りはなかった。

これら村役人の任務は、村落共同体の中核として、村民を督励して農耕をすすめ、租税の完納の責任を負わされたもので、村民はこれを親のように敬愛し、その命令にしたがうべきであるとされたものである。その出自も十村級とは変りなく、半郡でいうと、能登部上村の市楽のように、加賀の守護富樫氏に仕えた家臣であったと称するものもあり、能登部村（当時は下村とはいわず、単に能登部村といった）の永屋のよ

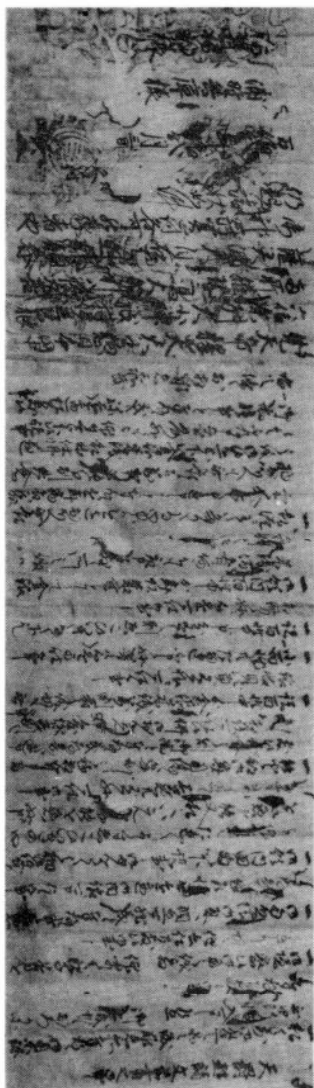
うに、浦野派の侍宇留地平八と親交があり、自分の子を平八の名付子として平右衛門と称した。というような羽振りのよいものもいた。

ついでながら、久江村の村役人としては事件当時肝煎佐藤左衛門の名が知られ、時代は下るが、延宝八年（一六八〇）に肝煎与三左衛門、組合頭二郎左衛門・甚五郎、文化五年（一八〇八）には肝煎は同じく与三左衛門、組合頭には平兵衛・平田・助左衛門らの名がみえる（鹿島町史・資料編、七三五―八頁）。十村は、こうした肝煎を頂点とする村々を、しっかりと上から掌握していたのであった。

百姓身分ながら、このように村々を掌握した十村たちは、ともすれば在地の侍たちから利用されやすい立場にあった。万治二年（一六五九）、道閑が浦野兵庫、阿岸掃部に提出した起請文によると、十村としての普通の心得のほかに、両士の取立てを感謝し、いろいろと忠勤をつくすことを誓っているのである。

そこで、浦野事件の中で果たした道閑らの役割についてみておこう。

道閑らが、はじめてこの事件に登場するのは寛文七年（一六六七）正月であった。すなわち、前述のような不隠な空気の中で領内の十村・村肝煎ら数十人のものが、検地中止を歎願するため、同志の連判状をつくり、金沢に上ってこれを長元連に提出し



道閑の起請文（『石川果史』より）

たのである。そして、その間に村方では浦野一派の侍や能登部村の肝煎永屋、十村高田村二郎兵衛の伴などが、検地忌避の宣伝につとめた。

この連判状づくりや金沢への上訴は、道閑の勧告によったものであるが、その逮捕後の口書（白状書）によると、これは全く自分たちの企てによるものではないと述べている。寛文六年の十月頃から浦野一派に検地中止の訴訟を行うようにすすめられていたが、自分たちの田地には不正はないので危険を冒してそのようなことをする必要はないということわっている。しかし、元連との間には決して悪いようにはとりはからわない、という了解ができているから、と宇留地平八らがやかましくすすめるので決行したのだ、というのである。

これは、拷問にかけられ、苦しまぎれに白状したのではなく、ある程度の真実を伝えていられると思われる。事実浦野一党と元連との間には、ある種の連絡がつけられていたらしく、元連から孫右衛門らにあてて、十村らの訴訟は聞届けた、よろしくとりはからうから百姓共には安心して就農させるように、という書状を出している。こうした裏付けがあったところから浦野一党も強硬に反対運動を続けたものであるし、十村らに金沢訴訟を強要したのであろう。事件後、元連に不信の行為ありとして、蟄

居を命じられたのも、このためであつたのである。

ここで、もう一度この事件における道閑の立場を考えてみよう。道閑は、前述のよ  
うな十村の惣監督のような地位にあり、極めて、重い責任も背負わされていたのであ  
つた。しかし、最初に述べたように、長家領は家臣が現地に在住するという地方知行  
を慣用していたのであり、現地の浦野一党の圧力は極めて強かつた。道閑が村の安寧  
をおもひ、平和をねがう立場から、検地中止のための金沢訴訟などにふみきれなかつ  
たのも当然であつたが、それと同時に一農民としての立場から、検地そのものに対す  
る危惧と警戒の念が、全然なかつたとはいきれないのである。

検地の意義については、前にも少し触れたが、農民たちにとっては決して歓迎すべ  
きものではなかつたので、その反対運動の事例は数多い。げんに半郡接收後の検地が  
如何にきびしいものであつたか、ということとは、後でみる通りである。

一般村民としても、検地反対のために捕われた十村たちに対して同情をよせ、藩の  
処置を非難したのは当然である。このとき半郡一円に人心大いに動揺し不隠な形勢を  
示したので、当局は蔭聞役（藩の諜報機関）を放つてその状を調査し、あるいは鎮撫  
につとめた（郡誌、一二六頁）というのは注目を要する。

## 五 道 閑 の 処 刑

關係十村らの  
処分

寛文七年（一六六七）閏二月、長連頼が領内の問題をみずから処理することができず、藩に訴えたところから、藩当局の手によって一挙に解決されたことは前述した。浦野一党とともに検地反対運動に参加した十村らも捕われ、そのうち左の九人は金沢に送られて長家の牢に投獄された。

十村 久江村道閑 能登部村上野 三階村池島 高田村二郎兵衛 同 八兵衛

笠師村太左衛門 同 仁右衛門

肝煎 能登部村永屋 同 平右衛門

やがて、三月十六日から同二十日まで、数回にわたって公事場（裁判所）にひき出され、訊問をうけた後、同二十九日、公事場の牢に移された。十村上野は、その夜死亡しているが、獄舎生活と訊問の苛酷をものがたるものであるう。

このときの訊問に対する十村らの白状を記した口書が長氏文書に残されており、それによって浦野一党と十村たちとの關係、地方知行のあり方などが知られ、まことに興味深い、ここでは省略する。ただ、これによって、道閑がこの訴訟一件の中心人

物であつたことが明瞭に語られている、という点を指摘するにとどめたい。

それは、前述のようなジレンマに陥りながら、断呼としてこの斗争の先頭に立った道閑の心情を汲みとり得ると思うからである。

同年十二月に至って、十村らの処刑が言渡された。その宣告状が長氏文書にあるが、極めて重要なものであると思われるので、その原文を左に引用しておきたい。

宣告状と高札

覚

此者於能州久江村はり付

長九郎左衛門領分十村 久江村

道 閑

道閑せがれ

兵 八

同

六太夫

此三人勿首

同

万兵衛

此者於久江村梟首

同領分十村 高田村

二郎兵衛

同領分小百姓 能登部村

長 屋

此者同断



是

以名於世而之曰打地可

以之人列之

以名於世而之曰打地可

以名於世而之曰打地可

以名於世而之曰打地可

通案

通案

無八  
六六八

同外分十打  
下り

同外分十打  
下り

同外分十打  
下り

道閑・二郎兵衛・長屋手前、重而於公事場、菊池大学・岡島兵庫被申談、各被罷出、被遂穿鑿、委細岡島甚七に被致言上被聞召届候、則道閑・二郎兵衛・長屋并道閑せがれ三人死罪被仰付

一、高田村二郎兵衛せがれ藤松・能登部長屋せがれ三右衛門、此二人は親景首被仰付者故、命御助被成、所にも置被申間敷事

右之通可致申付旨被仰出候間、可得某意候、以上

未十二月四日

奥村 因 播

本多 安 房 殿

横山 左衛門 殿

前田 対 馬 殿

奥村 伊 予 殿

今枝 民 部 殿

右の文書を要約すると、次のようになる。

1 差出人及び宛名をみると、藩の重臣連が名前を連ねており、重大事項として取扱っていること。

2 最高責任者の道閑はもともと罰が重く、自村久江村でハリツケとなっており、その忤三人も首を刎ねられていること（一説には 二人とあるが、三人が本当らしい）。

3 高田村二郎兵衛、能登部村長屋（永屋）は梟首（さらし首）となっていること。  
 4 同人忤二人（藤松・三右衛門）となっているが、前述八兵衛・平右衛門と同一人であろう）は追放となっていること。

5 罪状に比して、極めて冷酷な苛刑であったこと。

刑の執行は、同年十二月十六日で、検使津田孫十郎、横目渡部所左衛門であった。公事帳の抜書によると、その拷札（高札）は左の通りである。

張 付

鹿島郡久江村十村肝煎

道 閑

ゆへなき儀申立、同者百姓をかたらひ、書付せいし等の連判棟梁いたつらもの顕然之上、如斯被仰付者也

梟 首

鹿島郡高田村十村肝煎

次郎兵衛

同郡能登部村小百姓長屋

平右衛門

久江村道閑ゆへなき儀を申す、め候刻、書付・誓紙など致加判、いたつら者によ  
つて被仰付者也

未十二月十六日

「長家文書」と人名などに相違があり、信のおき難い点はあるが、大たいはこのよ  
うなものであったのであらう。

なお、翌寛文八年正月十六日、笠師村太左衛門・三階村池島の兩人は追放となつて  
いるが、その宣告文は省略する。

赦免使に關  
する伝説

諏訪藤馬氏は、このとき死罪を赦すという藩の使者が、羽咋郡今浜の茶店でお焼餅  
(生菓子ともいう)を喰つていたため時刻におくれた、という話を紹介されている。

刑場にかけつけたが、群集がそれを取巻いているため、検使に接近できないとみて、  
遠方から笠をもって招き、「しばらく待て」と合図したのを、急いで処刑せよとの合

図と思ひこみ、役人らはあわてて執行してしまつたといふのである（郡誌一四〇頁）。

この話はよくできているようであるが、少しバカバカし過ぎる。これでは、処刑を極めた重臣連中も、赦免伝達の命をうけた藩士も、笠のうごくのをみて執行を急いだ役人も、ひどいあわてものの集まりといふことになる。さらに、これと全く同じ話が、羽咋郡福野村の十村助太夫の処刑についても残されており、あちらこちらに語りつがれた義民伝説の一節でしかないと考えられる。

思うに、この種のはなしは、犠牲者を悼むのあまりにつくり出されたもので、このような残酷な処刑を受けるべきではない筈だ。少くとも、領主側はそれに氣付いて赦免使を派遣したのに、運悪く執行されたものだ、と自分にも他人にもいい聞かせたい、という心情の発露ではあるまいか。諏訪藤馬氏は、「嗚呼死を赦されて赦されず、一刻の差を以て謬あやまつて刑場の露と消えし道閑等は、一世の不幸児といふべく其の死や実に悲惨の極といふべし」と述べておられるが、それでは、かえつて道閑がはじめ過ぎ、その霊も浮ばれないことになるであらう。

結論を急ごう。要は、封建為政者の農民対策は決してそのように生やさしいものではなかつたといふことである。加賀藩には限らず、百姓一揆の主謀者ともあれば、た

とえ為政者の側に非があるということが明確に認められていても、百姓らのみせしめのために極めて惨酷な刑罰を科するのが通例であったのである。ましてや、一向一揆で農民らの斗争に手をやいた記憶も新たであり、ひき続き鹿島半郡の接収をもうろんでいた加賀藩にとって、これをもって百姓弾圧の機としたのは、事前工作のためにも当然であつたといえよう。

道閑を、所ところ磔はりつけ（在所でハリツケに処せられること）の極刑に処し、それに準じて子供たちも惨殺するという藩の基本方針には、終始変りはなかったとみるのがほんとうであらう。

記録の上では、道閑らの処刑とともに、久江村において、二郎兵衛・永屋の兩人も梟首されているのであるが、久江では後の二人のことは忘れられてしまい、道閑の処刑だけが語り継がれていたらしい。そこで、現在では、道閑の刑場跡というものが推定され、そこに記念碑が建てられているのであるが、その由来を少し述べておく必要がある。

久江の旧家に河内家というのがある。道閑が河内から来た、というところから、道閑に随従してきたものの子孫であると信じられていたが、その家の持山うしろたにである後谷が、

古くから道閑の刑場跡であるといひ伝えられていた。ところが、戦時中ここに芋をつくるため堀りおこしたところ、甕の破片が出土したので、これをもって「道閑血受けの甕」と推定され、今も久江小学校に保存されている。

さらに、昭和三十二年道閑の二百九十年忌にあたり、この地を整地して、その刑場跡として体裁をととのえることとなったのである。

このように、この地を刑場跡としたのは、全く伝承によったのであり、甕とても、この地域にひろい分布をもつ珠洲焼（鹿島町史・資料編、一九六頁）に類するもので、確実性は乏しい。しかし、この地からは久江はもちろん、遠く鹿島半郡一帯を見はらすことができ、一世の義民道閑の刑死の地としては、もっともふさわしいものであるう、と評判がよい。

新十村の任命

このように、領内五人の十村がすべて処分されたため、早速新しく十村を補任しなければならなかった。すでに、道閑らの検地反対運動が起こると、藩はそれに賛同しなかった村肝煎らに銀子など恩賞を与えたりしていたが、寛文七年三月、道閑らが逮捕されると、右の村肝煎のうちから新十村が任命され、翌八年二月には、それぞれ跡屋敷が下賜された。それは、左の通りである。

久江村道閑代り

酒井村大和

高田村二郎兵衛

春木村源五

三階村池島 一 代り

能登部村上野代り

同村市楽

笠師村太左衛門代り

水白村大老

(注) 二郎兵衛屋敷は大老に、能登部村永屋屋敷は源五に与えられた。

道閑に代わって十村となり、その屋敷を与えられた酒井村大和は、久江村に引越すにあたって万兵衛と改名したという。万兵衛とは道閑の旧名であるといわれ、げんに刎首された三男は万兵衛と称していたのである。いづれにしても大和の改名は、諏訪藤馬氏もいわれたように、「地方民に対する緩和策」であつたかも知れないが、前述のように「万兵衛屋敷に鬼が出る」というような俚謡が行われたとすれば、久江村民からは余り好感をもって迎えられたとは考えられない。

事実大和は、その後五年目の寛文十二年までに芹川村の兵衛と交代したらしく、以後史料に名をあらわさないのである。



## 六 半郡接收と改作法施行

尚連の相続  
と半郡接收

浦野事件の落着後、藩が直ちに半郡接收にのり出さなかったのは、騒動の経験にかんがみて隠忍自重、時をかせいだためと思われる。そして、それから四年目、長連頼の死去を機として一挙にそれを敢行したのである。

寛文十一年（一六七二）三月、連頼が死亡すると、ひとまず藩は尚連ひさつらを相続させた。尚連ときに十歳であった。そして、同年十月二十二日江戸より下命してその領地半郡三万一千石をとりあげ、同額の知行所を他の村々と与えた。それが、実収入の上で不利を生じたので、弟の房連に別に千石を与えて分家させたのである。

こうして、長氏も他の家臣なみに分散知行所を領有することとなり、目の中にはさまったゴミのような藩内の独立国は解消した。すなわち、藩は、利家以来の懸案を解決することができたのである。

この接收のとき、虚空こくうに太鼓の音が響きわたったという。それは、連竜以来の領主権が失われたのを、天が歎いたためであるといい伝えられているが、実は、半郡百姓の怒りと悲しみの声を反響した、とみるのがほんとうであろう。というのは、この接

収に引続いて行われた藩の検地は、言語に絶する苛酷なものであったからである。

前にも少し触れたが、改作法というのは、綱紀の初世、後見役たる祖父利常が、慶安から明暦にかけて施行した農政大改革のことで、その骨子は、給人（知行所を与えられた家臣）と知行所との直接交渉を禁じ、その代りに村々の高（收穫見込みの公定高）と免（税率）を上げ、それを定免（税額の固定）として給人と藩の収入を安定させようとするものであった。そして、その前提として、村毎にきびしい検地を行ないさかんに隠田を摘出したのであった。

いまや、藩は望み通り鹿島半郡を接収した。次は、急いでこの地に改作法を施行し、他の地方と同じ取扱いにせねばならなかった。

寛文十二年（一六七二）二月六日、半郡十村五人に向って改作奉行（農政専門の奉行）連名で「改作仰せ渡しの覚書」が達せられている。ついではながら、十村のうち大和はすでに芹川村兵衛と交代し、他に高田村権正（ごんのしやう）が加わって五人となっていたのである。

この覚書は、十村の服務上の心得を示したもので、その内容は次の如くである。

1 勸農のために切々村廻りにいそしむこと。

2 百姓の奢侈を禁じ、消費をおさえ、耕作に入情させること。

3 米・銀の頼母子たのもしをしたり、寄進集めの僧などを入村させないこと。

4 他郡なみに毎歳定作喰米を貸渡すから、浪費しないこと。

5 百姓入用のために郡単位では御郡打銀（地方税のようなもの）を徴収するが、その他の徴収を禁ずること。

6 村単位では、肝煎給米と走り（村の雑役人）給米のほか、徴収を禁ずること。

しかし、何よりも強大な影響を与えたのは、同年施行した検地の結果であって、三万一千石を実に五万五千三百六十石九斗に極めたことである。つまり、三分の二以上を打出したもので、もちろん、免（税率）はそのままとしても、それだけ租税が高くなるのである。

もとより、同地は浦野一党の勢力下にあったところから、鋭意隠田開発を行なったのであるから、多少の打出しは予想されたところではあったが、この殺人的な上げ高は、明らかに百姓たちをまず威圧する、という意図に基いたものと思われる。その証拠には、その後おいおい引き高を行ない、ついに三万九千石余にまで下げられたが、このような大巾の引き高は、他郡ではめったにみられぬ現象であったのである。

加賀藩では、明暦二年（一六五六）改作法成就の際、村毎に草高（公定收穫高）、免（税率）、夫銀（勞役奉仕の代りにおさめる銀高）、口米（納租米のほかにおさめる米）、小物成銀（海・山の用益や特殊な党業に対する雑税）などを記載した文書を下附した。これに綱紀の使用する黒印がおしてあったから、村御印と称し、どの村でも神聖視して大切に保存したものである。その後寛文十年（一六七〇）に新京枥を採用したについて、これを書き替えて明暦度のものと交換した。鹿島町に残されているもののうち、二宮村以北の分の村御印の日附が寛文十年九月七日となっているのは、この地域が長家領でなかったからである。

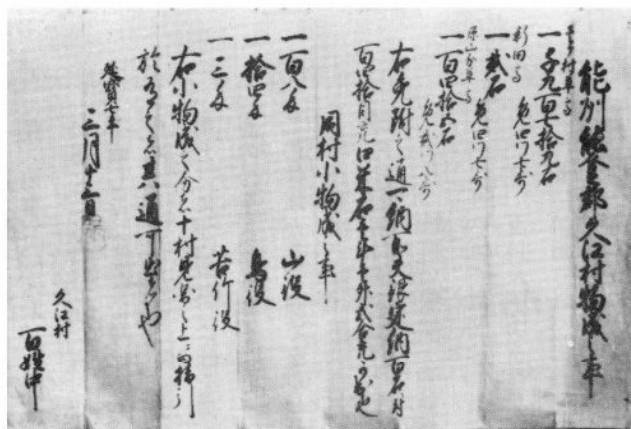
旧長家領では、前述のように延宝七年（一六七九）に改作法を完成したから、村御印の日附は同年三月十三日となっているのである。いま、左に久江村の分を示す。

能州能登郡久江村物成之事

老ケ村草高

一、千九百七拾九石

免四つ七歩



久江村の村御印

新田草高

一、貳 石

免四つ七歩

原山分草高

一、百四拾五石

免貳つ八歩

右免附之通可納所、夫銀定納百石二付

百四拾目充、口米石壹斗壹升貳合充可出也

同付小物成之事

一、百八匁 山役

一、拾四匁 鳥役

一、三 匁 苦竹役

右小物成之分者、十村見図之上二而指引  
於有之者、共通可出者也

延宝七年

三月十三日 (黒印)

久江村

百姓中

重要な文書であるから、ちょっと解説を加えておこう。

能登郡というのは、古くは鹿島郡と称していたのを、寛文十一年（一六七二）に改称され、元禄十三年（一七〇〇）にまたもとの鹿島郡に復したのである。物成は正租のこと、免附はこのような租税令達をいい納所は上納のことである。この免は定免といつて、年の豊凶にかかわらず変更されなかったのであるし、草高が割高に決められると、毎年高い租税を上納せねばならないことになる。

久江村の草高千九百七十九石が如何に割高であったかは、文化三年（一八〇六）の巨細帳（村勢一覧のような帳冊）では、千六百五十三石三升と三百石以上も引高となつてゐることからも知られる。

久江村の草高千九百七十九石という数字は、浦野事件という悲劇のもたらした収奪強化の表示であった。道閑に対する農民の思慕の情は、実にここから高まつてきたのである。

## 七 道閑に對する追慕

## 道閑伝説

半郡接收を契機として、このような無慈悲な擄取が強行されたとき、検地中止の訴訟を指導したという理由だけで、子供三人が殺され、その身は脇腹に槍を突きたてられて、むごたらしく殺された道閑に對する追慕の念のたかまるのも、当然のなりゆきであつた。

道閑の事蹟に付会して、さまざまな伝説や怪異談のあらわれたのもそのため、前述した赦免使の話もその一例である。「石川県鹿島郡誌」には、そのほか各種の伝説をのせているが、それをここに紹介しておこう。

## 検地竿一件

その一つは、酒井村で道閑が検地竿はかりなわを踏み折つたという勇ましいものである。このとき三階村の十村池島は、この竿と丈繩はかりなわとを奪つて家に逃げ帰り、人知れず土中に埋めて、その上に一本の杉を植えてしとした。池島は、検地の中止が成功しなかつたら、道閑に代つて再挙をはかろうと決意し、その後ひそかに越後に逃亡したというのである。酒井村は、長家領の西端であるから、この村から検地が始められたことは事實であるが、もちろんそれが防害されたという史料はないし、池島が越後に去つた

のは、追放された結果なのである。前述羽咋郡の助太夫の場合にも、検地竿を踏み折ったとかいう伝承はあるのであるから、検地反対斗争には、つきものはなしであろう。三階村の場合は、この杉が枝も繁らず成長しなかったというのであるが、これは郡誌の注記にあるように、後世享保検地の際に使用した丈縄を、時の十村平内が、その記念に土中に埋め、その上にするしの杉を植えた、という方がまだしも信用できる。

次に、酒井村の川切高というのがある。これは、寛文検地の際、最初にここに竿入れたのを、道閑が踏み折ったため、検地は中止され、そのためこの三十石余の見つもりがすこぶる辛くなったので、維新前までここを寄合田としてきた、というのである。しかし、これも郡誌の注記には、元禄の頃酒井村の組合頭与四郎が、時の検地が粗雑で土地に寛嚴のできたのを不服とし、訴え出たため一年余も投獄されたが、そのため同十一年（一六九八）に検地竿入れが行われ、結局七十石余の増高となったことを、道閑一件に付会したものであらうとしている。

久江附近は螢の多い土地で、毎年夏の夜ともなれば数団の螢が八谷口よりあらわれ、さかんに飛び交うので、螢合戦と称した。そして、これが道閑の亡魂である、と伝えられたものであった。



また、初夏の頃、至るところに目口もあかれぬ程多数のカゲロウが飛び立ったもので、これを日一期と称した。そして、これもまた蛭と同様、道閑の亡魂であるという伝えが古くからあった。

蛭は、闇の中に青白い光を明滅させ、日一期ひいちこは、その名の如くはかない命の虫である。ともに、この地特有の自然現象に過ぎないのであるが、これらにも道閑の亡霊を感じたということは、やはり道閑に対する追悼のあらわれであつたろう。

郡誌には、その成立当時の昭和初期において、すでにその数の減じたことを嘆じ、「今は全く昔語に過ぎざること、なれり」などと書いているが（九五頁）、人家も増え、農薬の普及した今日では、いよいよその感を深くするのである。

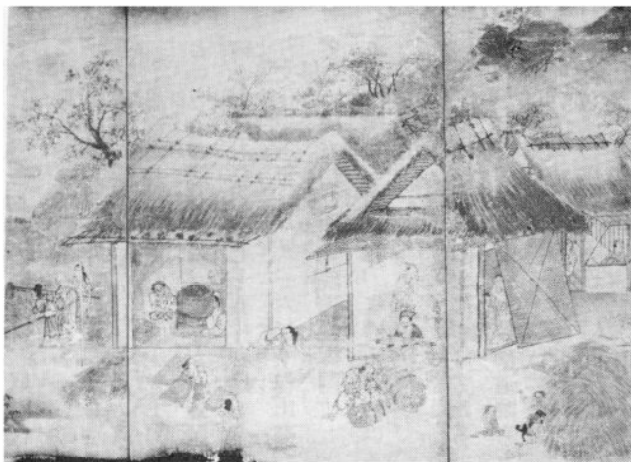
今はむかし、収穫米の調整のために、大きな臼を何人かが力を合せてひいたのであるが、その辛気な作業を力づけるために、声をそろえて歌をうたったものである。これを臼すり唄といったが、半郡一帯にうたわれたものの中に、

こけばしにこそげたいて臼にすり 箕にあおいで代官様のお目にかけ  
 なんぼ代官様でも糶あるくと 米は糶から出たもんじゃないや

などというのがある。「こけばし」は「こきばし」で、ずいぶん古い脱穀器のこと

久隅守景の四季耕作図六曲屏風（重文）  
に描かれた収納期の農民

（加賀藩の風景かどうかは不明である）



脱穀調整から俵装までの作業。家の中で  
臼をひいている。



奉行（又は代官）が収納額を村民に示してい  
るところ。立って応答している人物は十村  
か村肝煎にあたる。

であるが、これらの唄には、収納代官の租米検査のきびしさと、農民の辛苦がうたいこめられている。さらに、

おいたわしや（「あ、いとしいやいな」ともある）ところやちの道閑様は 七十  
五村の身代りに（「あ、悲しいやいな」と続けるのもある）

というものの悲しい唄があるが、道閑への追慕をはなだ卒直にうたったものである。いうまでもなく、七十五村とは五十九カ村のことで、旧長家領鹿島半郡をさす。

#### 市楽の建碑

文化十三年（一八一六）十村市楽が、道閑の百五十回忌供養として久江村に墓を建てた。碑文に「迎覚院道性禪門位」とあり、長楽寺過去帳記載の法号と一致する。それが、現在も残され、まつられているのであるが、市楽が何故、このときにこれを建てたのであろうか。

まず、市楽家の由来についてみると、その祖先は、浦野事件当時能登部村の肝煎であったが、同村の十村上野や道閑らとは対立関係にあり、そのため検地訴訟には参加しなかったのみか、その密告者として一派から恨まれていたものであったと伝えられている。そして、それ故に前述の通り上野に代わって十村役に抜てきされ、その屋敷を与えられたのであった。しかも、百五十年の間に十村家にも移動や隆替があり、こ

の近傍で十村として栄えていたのは、市楽だけであつたのである。

諏訪藤馬氏もこの事情を述べ、この追悼事業をもつて、「民心緩和の策」であつたとしておられるが（郡誌、一四〇頁）、その頃羽咋・鹿島両郡では、容易ならぬ不隠の事態に迫られていたというのを、あわせ考えなければならぬ。当時、凶作のときなどしばしば百姓一揆やうちこわしが起こつたが、文化十年（一八一三）十月には、このあたり一帯に大暴動が勃発したのであつた。

それは、藩が凶作にもかかわらず租税上納を強制したところから端を発した。当局はそのため百姓に食いつなぎ米を貸しつけたが、その分配法の不満を訴え、酒井組・能登部組の農民らが、大挙して十村の惣助や、市楽の役宅におしかけて強談したのである。さらに笠師組では米買占めを行なつて巨利を得ていた中島村の富商らの家をうちこわすに至つた。

この騒動は、さらに藩が貸米を増し、百方鎮撫してやつとおさまつたが、笠師組の藤瀬村肝煎与三郎は、中島村うちこわしの首謀者であるとみられ、村はずれで梟首（さらし首）の極刑に処せられた。後日談となるが、白骨化した与三郎の首が、寒風の吹くたびにヒューヒューと音を發するので村民がおそれてそれに近寄らず、そのため

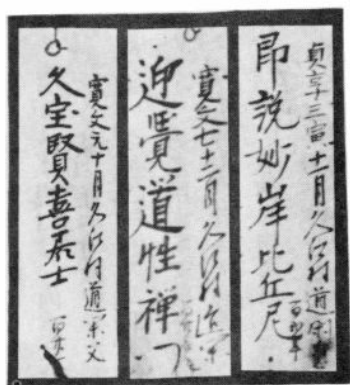
農作業にもさしつかえると当局に哀訴した結果、その首がやっと取下げられたのは、文化十二年二月であった。市樂が道閑のために墓を建てたのは、実にその翌年のことであつたのである。

一揆さわぎがおさまり、首謀者が処刑されたとして、それで平穏がとり戻せたとは思えない。為政者は、その後もはれものにさわる思いで、農民に対したことであろうが、それだけでなくとも百五十年間の農民の恨みを一身に背負つた十村市樂にとって、文化十年十月の騒動に際し、ホラ・竹筒の音にまじって聞えた農民らの罵声は、道閑ののろいとも聞えたことであろう。市樂の仏ごころは、まさに死せる道閑、生ける市樂をはしらせた結果であるということができらるであらう。

#### 道閑の遺族

道閑が処刑されたとき、三人の男子も刎首になっている。一説にはこのうち一人を女子といつわつて助命し、それが七尾に移つて商人になつた、とあるが、それはあてにはならない。しかし、不思議にも、長樂寺の過去帳には、寛文元年（一六六一）十月十日に死亡した道閑の娘の「妙寿童尼」という法号をのせてあるが、七年十二月十六日には、道閑の法号を記載しながら、三人の男子の分は見あたらないのである。

なお、その内室の分は、貞享三年（一六八六）十一月十六日、「即説妙岸比丘尼」



長楽寺過去帳  
左から道閑父、道閑、道閑内室



道閑内室と子供の墓  
(七尾市妙観院)

として記載してある。また七尾市小島の妙観院にはその墓があり、内室の法号の左右に男女二人分の法号が刻まれているので、道閑の刑死後、残された幼児二人をつれてこの地へ移住したものではないかといわれている。妙観院は、長楽寺と同じ真言宗で、両寺は古来特別に親しい関係にあったのである。

一説には、内室は七尾の本竜寺（真宗東派）の出身で、名を園といい、このとき実家に帰って出家したともいうが、その子細は不明である。

ところで、「浦野一類所刑一件」（金沢市立図書館所蔵）にのせられた長連頼あての老臣本多安房守らの書状に、次のような一節がある。

一、於当所籠舎被 仰付候御手前知行所久江村道閑せかれ兵八男子産申候  
右御書物之通令承知候、兵八せかれ末くノもの二候間、御構も有之間敷かと存  
得共、いたつらもの、せかれノ事候間、御家来へ御領置候而も可然存候（下略）。  
兵八の子供は男子ではあるが、末々のものだから死刑にされるようなこともあるまい。しかし、叛逆人の子供だから、連頼の家来に預けられたらよからう、と示唆を与えているのである。

この書状の日付は十二月十三日であるから、この新発見の史料で、処刑直前に道閑

の孫が生まれたことが明らかになったのである。入牢中の道閑は、このたよりを聞いたかどうか、おそらく初孫の顔もみずに処刑されたものであらうと思われ、あわれさがいや増すのであるが、連頼はこの赤ん坊をもて余し、道閑の内室に下げ渡したのであるまいか。

このような事情から、内室が男子を女子といつわって助命し、七尾へ連れて帰った、というような話が生まれたのであらう。おそらく、内室は兵八の嫁とその子をとまなつて七尾に帰り、両女は出家したらしい。妙観院の墓の正室の左側に記された「慶山妙得比丘尼」とは兵八の嫁で、右側の「正伝清栄信土」とあるのがその子のことではあるまいか。この想定が正しいとすれば、この墓はその子孫が、七尾道閑家の鼻祖のために建てたものであらう。

七尾道閑家の幕末頃の当主九左衛門は、飾屋かざりをもつて渡世し、冠かんむりつくりの名工であったという。鹿島町最勝講さいしやうこうに鎮座する天神社の神輿の裏書に、金具所口塗師町住人「道閑九左衛門」とあるのが、おそらくこれであらう。年号は安政四年（一八五七）である。（鹿島町史・資料編、三一二頁）。

この九左衛門は信仰心のあついで、妙観院へ不動明王の仏像を寄進したという。



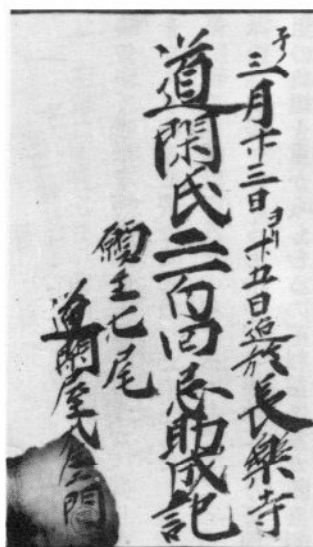
元治元年（一八六四）に長楽寺で先祖道閑の二百回忌を施行したのもこの人らしく、その「助成記」なる帳冊が、高畠に保存されている。惜しいことに、この帳冊は表紙だけで本文がないので、その内容は不明であるが、おそらく資金勧進のためのものであろう。それが、高畠に残されているところから、九左衛門が、五十九カ村全部にわたって募金したと思われ、道閑追慕の念が半郡全般にわたっていたということを示している。

これは鹿島町史編集のための史料収集中に発見されたものである。藩政末期、維新の動乱を目前にひかえた時代に、その子孫によって、道閑の二百回忌の法要を、多くの村民の助力によって施行しようとした史料が、本年、三百年記念行事が盛大に行われようとするに先立って世に出たのも、何かの因縁であろう。

ついでながら、道閑家はその後富山県に移住、現在道閑健平氏が御建在である。



道閑九左衛門が妙観院へ寄進  
したという不動明王像



道閑200回忌助成記の表紙

## 八 加能義民 第一号

従来の解釈

最後に、道閑事件の歴史的意義について考察を加えておこうと思うが、其に先立つて、この事件に関する従来の解釈をかえりみる必要があるう。

まず、日置謙氏編「石川県史」第二編の「浦野事件」の項に扱われたところでは、道閑らの金沢訴訟一件は、浦野一派の「教唆」によるもので、「検地によりて隠蔽せる地積を明白ならしめ、随ひて貢租の負担を重からしむるの不利益ありたるを以て」と、すこぶる妥当な見解を示しながら、農民のうごきについては、「之に附和雷同するもの多く」と簡単に解説し、その根底に横わる問題については、全く触れられていない（四六六頁）。要するに、「石川県史」では、五代綱紀の時代をもって、加賀藩治恢弘期（もっともさかんな時代）と考え、その一端として長家領鹿島半郡の接收事情を述べるのが本旨であつたので、道閑事件は軽く見送られた感があるのである。

これに対し、「石川県鹿島郡誌」は、浦野事件に多くの頁を割き、引用史料も豊富である。とりわけ、その所収「諏訪藤馬文書」では「道閑は義民か將た乱民か」というテーマをかかげて、道閑一件の経緯を詳述するとともに、いろいろな角度から考察

を加え、義民伝説としての特質にまで周到に論及されている（一三六―一四二頁）。

しかし、結論的には、両者ともに藩側からの解釈の域を出ず、農民の側からの考察が足りないように思われる。

まず第一に両者に共通する農民観は、無知蒙昧の衆愚ということである。たしかに、財源のすべてを農民の租税に求めた封建時代では、農民をあくまで無知の状態に止め、搾取を容易にすることが、農政の基本線であったということは考えられる。

「昇平夜話」に出てくる徳川家康の言葉に「百姓共は死なぬように、生きぬようにと合点して、租税収納を申しつけよ」というのがある。加賀の三代藩主常田利常も、百姓は鷹と同じである。肥った鷹は鳥はとらないように、百姓も衣食が満足であれば農業をおろそかにする。また、鷹に力がなくなれば鳥を逃がしてしまうように、百姓もつかれてしまえば田畠の管理ができないだろう。

と、気味の悪い程似たようなことをいつている。その利常は、改作法という農政大改革を実施したとき、十村に鎗や鉄砲をもたせ、不精百姓は追放、または打殺してもさしつかえない、と厳達した。これは、記録にも残らない個別的な農民の反抗が頻発した事実をかたるものであろう。

たしかに、農民は無知であつたろう。否、無知にされていたのであるが、收穫の半分以上を租税にとりあげられ、そのため飢餓はいつもその門口かどぐちに迫っていた。したがって、前述のように、租税の加重を意味する検地に対して鈍感であつた程無知であつたとは考えられない。

その上、諏訪藤馬氏のいわれるように、道閑らは浦野一党と結び、そのため多少の恩恵をうけていたかも知れず、また、彼の性格が直情径行で、敵の多い人物であつたため、多くの肝煎が連判せず訴訟に加わらなかつた。ということもあり得たであろう。しかし、道閑らが逮捕されるや、村民がおおいに動揺し、当局の非を鳴らすとともに、犠牲者に対する同情の声が高まって来た、という事実は、事態に対する農民の本能的な認識を雄弁にものがたつていゝものではあるまいか。道閑刑死後の彼に対する追慕の情は、單なる同情からではなかつたのである。

百姓一揆  
生件数

本居宣長は、百姓一揆について、「能々堪よくよくたえがたきに至らざれば、此事はおこる物にあらず」とみているが（秘本玉くしげ）、封建権力に抑圧され、過重貢租をおしつけられていた限り、百姓はいつも「能々堪がたき」に至る危険にさらされていたといえる。京都大学農学部農史研究室の調査によれば、全国の百姓一揆件数は一六三五件を

こえており（百姓一揆年表）、加賀・能登両国では、おのおの二五件・六件となっている。

しかし、筆者の計算では、加賀四一件、能登一四件、計五五件となり、川良雄氏の「打ちこわしと一揆」もほぼ同数である。それは、安政五年（一八五八）の全領域にわたる一揆を京大の調査では一件とし、筆者はその地域をそれぞれ一件にかぞえたので多くなったせいもあるが、それ以外に拾ったものも加わっている。それも、記録に残されたもののみであるから、実数はもっと上廻るものと考えねばならない。

ところで、ひとくちに百姓一揆といっても、その形態や性格には時代による相違があり、全国的にも、江戸時代前期は、有力な大百姓が多く、村民を代表して、直接領主に訴願するものが多く、その理由は検地や租税ひきあげに反対するものであった。しかるに、中期以後となると、村民のほとんどが参加し、加賀藩の場合には、前に述べた文化の一揆のように、村肝煎が指導者として犠牲となる例が多かった。それも、貨幣経済の発達に應じて、町方の金貸しや米などの買占商人の宅をうちこわすものが多い。指導者も往々にして下級農民や町の貧民の中からあらわれるのである。前者を代表越訴型といい、後者を惣百姓一揆型というが、前者のうちもっとも有名なもの

は佐倉惣五郎である。

(注) 佐倉惣五郎は、木内宗吾・佐倉宗五郎などと名称もまちまちであるが、ここでは、後述児玉幸多氏の考証によってこの名に統一した。

そして、わが道閑事件は前者すなわち、代表越訴型に属するものといえることができる。

道閑と惣五郎

諏訪藤馬氏は、佐倉惣五郎の法号を「涼風道閑居士」と称するところから、道閑の事蹟が惣五郎伝に仮用されたものであるという説を否定し、両者の事蹟の相違点を述べておられる(郡誌、一四一頁)。たしかに、惣五郎の刑死は承応二年(一六五三)であるのに対し、道閑のそれは寛文七年(一六六七)で時代が前後していること、前者は時の將軍に越訴するという日本的な大事件であったのに対し、後者は辺境の長氏一家の私事に過ぎず、しかも浦野一党に扇動され、派生的に発したものであった。だから、逆に佐倉義民伝が長閑伝説に転入したとみるのが妥当であるといえるのである。

しかし、両者を単に外見的条件で比較するだけでは、その意義をたしかめることはできない。だいいち、児玉幸多氏の「佐倉惣五郎」(人物叢書10)によってみても、佐倉騒動は話の有名な割には伝説的な要素が多く、肝腎の將軍直訴もその理由も、史

料的に実証することはできないのである。

児玉氏の精密な考証によって、佐倉騒動を洗ってみると、惣五郎は村内一、二の大高持であること、刑死のとき子供四人が同時に殺されたこと、その祟りをおそれて里民が祠をたて、続いて領主堀田氏の歴代がその追悼のために、しばしば祭祀・供養を行なったことなどが知られる。そしてその理由は必ずしも明確ではないが、惣五郎が佐倉の城門に迫って訴訟をしたという話などに、ある程度の事実が含まれているのではないか、と児玉氏は結論付けておられる。

これにくらべると、道閑の場合は、まだしも基本史料に恵まれ、経緯がはっきりしているということが出来る。そして、伝説のヴェールをとり去った佐倉騒動の様相が、多少の違いはあっても、道閑の場合と酷似していることが知られるのである。すなわち、道閑事件は、惣五郎事件と同様、典型的な代表越訴型の百姓一揆であった、ということができるであろう。

加能義民第  
一号

加能における百姓一揆の件数は、前述の通り五十五件をかぞえることができる。しかし十村が指導したのは、記録のない福野村の助太夫一件は別として、後にも先にも道閑事件だけである。そればかりではなく、これに続く正徳二年（一七一二）の大聖



寺藩の大一揆や、石川郡の一揆以後は、ほとんど十村が農民の強訴・うちこわしの対象となつてゐるのである。それは、十村の官僚化がすすみ、村落共同体の中核的位置から浮き上がる過程と併行してあらわれる現象であつた。

このようにして、わが道関は、加能義民の第一号として、注目すべき位置を占めてゐるのである。

付録  
一

久氏比古神社と道閑祭

小倉

学

## 内 容 細 目

は し が き

### 一、久氏比古神社

久氏比古神社のあらまし

久江村の神々

道閑の鎮守といわれた備神社

祭神と創祀の由来  
愛宕神社

### 二、道 閑 祭

神事のあらまし

神事の推移

神事の古儀

神事の由来と特徴

### 三、道閑祭の記録と当屋一覧

諸記録の解題

現在の谷内兵衛方・道閑方名簿

道閑祭当番名一覧

# 久氏比古神社と道閑祭

小 倉 学

は し が き

能登の鹿島郡鹿島町の久江<sup>くゑ</sup>では、昭和四十二年七月に園田道閑<sup>どくかん</sup>の三百年祭を挙行することになり、その事蹟を顕彰するとともに記念の事業を進めつつある。道閑は久江村の人、慶安四年（一六五二）に能登の鹿島半郡の十村頭となった。当時、鹿島半郡三万石余は加賀藩の老臣として知られた長連頼<sup>ながのり</sup>の所領であった。たまたま寛文六年（一六六六）、検地が実施されようとした時、道閑等は農民のため同志とともに検地反対の運動をおこした。故をもつて同七年（一六六七）三月に捕えられ、同年十二月、久江において磔<sup>はりつけ</sup>の刑に処せられ、三人のせがれも刎首<sup>はなづき</sup>となった。その壮烈な最後は農民の同情をあつめ、後世にいたるまで義民として追慕され、庶民のなかに生きて今日におよんだのである。

道閑の事蹟をはじめ事件の経過および意義等については、若林喜三郎教授の詳述にゆずり、ここには、道閑が在住した久江村の古社として知られる久氏比古神社<sup>くしひこじんしゃ</sup>ならびに関係の神社、さらにまた道閑祭<sup>どくかんまつり</sup>とよばれて親しまれてきたオケラ餅の神事等につき考察を加え、義民道閑をしのぶこととしたい。

一、久 氏 比 古 神 社

## 久氏比古神社のあらまし

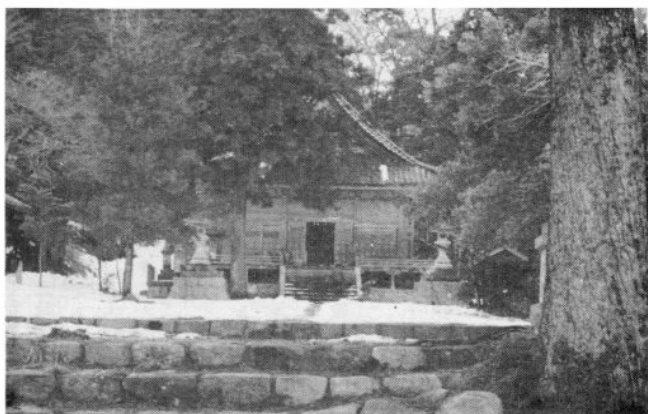
能登の鹿島郡鹿島町の久江に鎮座する久氏比古神社は、古来、久江村の氏神と仰がれてきた古社である。久江村は、東方につらなる石動山山脈の西麓に発達した街村で約一九〇世帯、農業を主とするが、今は機業を営むものや給料生活者が少なくない。古代の上日郷に属する古い村落で、早くから開発されたことは横穴古墳の存在によつても想像されようし、交通上も、加賀から能登の国府にいたる能登路に沿ひ、撰才駅（羽咋市大町）と越蘇駅（七尾市江曾）との中間に位置する要地だった。

神社は、東方の山中から西流する久江川（桃瀬川）の北側、剣山（官山）の麓に西面する。「神社明細帳」によれば、祭神を久延毘古神・天目一箇神とし、軻遇突智命（愛宕神社の祭神）を合祀し、境内神社の貴船神社（阿賀女命）・櫛神社（太玉命）・諏訪神社（建御名方命）を社務所の一室に合わせ祀っている。拝殿は三間四面の入母屋造で屋根瓦葺、その奥に覆屋と幣殿とを連接する。本殿は覆屋のうちに一間杜流造の二社が併立し、向つて右を剣神社、左を合祀の愛宕神社とする。

この剣神社は、もと剣明神とよばれ、「延喜式」の神名帳に所載する能登国能登郡の十七座の一つである久氏比古神社にあてられてきた。貞享二年（一六八五）九月に、本社の人だった今井式部が提出した書上に

能州能登郡久江村剣大明神ハ久氏比古神社之由及承申候、縁起等無御座候ニ付、開闢ハ知不申候、

と見えるとおりである。現存の棟札を見ると、もつとも古い延宝五年（一六七七）および宝永五年（一七〇八）のものでは「剣明神」あるいは「剣大明神」としているが、近世も末期に近づく、享和三年（一八〇三）・文化六年（一八〇九）以下の棟札は、みな「久氏比古神社」を称している。公文書においても同様である。すなわち宝暦十年（一七六〇）の社号書上帳をはじめ文政十一年（一八二八）以下の書上の類はことごとくそうである。また、吉田家の神道裁許状においても、享保十八年（一七三三）・延享元年（一七四四）・明



久 比 古 神 社

和六年（二七六九）等のものはみな「久比古神社」とする  
のである。

本社が延喜式内社であることについては、すでに近世初  
期の『能登国式内等旧社記』に

久延比古神社、式内一座、久江保久江村地内剣山麓鎮座、故称二剣  
大明神一、

と明記するのをはじめとして他に論社を見ず、まさしく式  
内の名社と仰がれ、明治に入つてからは地方最高の社格だ  
つた県社に列したのである。

### 祭神と創祀の由来

からば、本社の創立の由来はどうかというに、これに  
関しては文献や伝承に見るべきものがないため明らかにし  
がたい。剣明神時代は、祭神を天目一箇命とし、相殿の神  
を久延毘古神としていたようだったが、後には逆転して久  
延毘古神を主神とし、天目一箇命を相殿とするようになつ  
た。例えば、慶応四年（一八六八）の書上に

但、当社祭神、文政度祭神天目一箇命、相殿久延毘古神と書上候得  
共、由来相調理候処、元来、久延毘古神祭神ニ而、天目一箇命ハ相  
殿ニ御座候、往古、泰澄大師石動山を開かんため当社江心願をこめ、  
拝殿ニおゐて香ヲ焼、剣の舞を被舞候より、于今拝殿を香堂とも剣

さまとも相唱候処より、いつしか劍ノ神と相心得候而天目一箇神を本祭神の如く書上候哉と存候、毎年三月十二日、白求餅神事与申而種々相備江申候、此祭り方も久延毘古神二者由縁有之祭ニ御座候間、以後、祭神右の如く書上申度御座候、

と弁明するようになったのである。天目一箇命は、古代にあつては鍛冶部の神と考えられており、「日本書紀」には作金者とされ、「古語拾遺」では筑紫・伊勢両国の忌部の祖神とされて天石屋戸の神話で刀剣類を作る役をしている。そんなところから、おそらく社名の劍明神にちなんぞ想定された神名であろう。

これに対して久延毘古神は、「古事記」によれば、大国主神が出雲国にましました時、はるか海上より来たり給う神をば少名毘古那神と言ひあてたことをもつて知られ、この神は「山田のソホドというもので、歩かないで天下のことを、ことごとく知っている神だ」と伝えられている。そこで久延毘古神は案山子やさすものと考えられてきた。案山子は田の中に立つて害獣や悪鳥を防ぐが、これこそ神の依代と信じられてきたものである。春は山から田に下つて田の神となり、秋は山に帰つて山の神となるという信仰は全国的に見られるものである。山麓と水田地帯との境界ともいふべき好地に鎮座する本社祭神を、農神である久延毘古神となすのは、まことにふさわしいと一応は考えられるであらう。

しかし、さらに深く考究すれば、祭神を久延毘古神となすのは、社名の久氏比古神社に附会しすぎた感がある。社名の久氏比古が久延比古の転訛であることはいふまでもないが、その久延（くえん）という語は、「崩え」・「崩ゆ」の意であらう。すなわち土地が崩壊する、動き崩れる地すべり現象をあらわす語だと考えられるのである。今日の久江地方が、はなはだしい地すべり地帯であることは、近くは明治三十七年における久江原山分の大地すべりを想起するだけでも理解されよう。また、この山続きである石動山も「石動ぐ山」であり、ここに鎮座する神社が「石動ぐ比古」―伊須流岐比古神社（延喜式内社）である。これまた久延比古の神と無縁ではあるまい。かように考える時、久氏比古神社は、古代における地すべりという人力をもつては如何ともなしがたい大自然の威力に対して深く畏怖をいだいた古人が、おそるべき

自然の靈威を神格化して「クエヒコノ神」と仰ぐにいたつたものではなからうか。したがって、久氏比古神社の創祀は悠遠なる古代にもとめられるであろう。これを強いて古典に見える神名に附会する要はあるまい。久氏比古神は、いわゆる国津神である。この神を奉じて古人は久江地方を開発してきたのである。やがて、その神威が中央政府に聞えたと、地方神から国家神となり、国幣にあずかる神社となつたのである。

かような名社であつた久氏比古神社も、近世にいたるまでは資料がなくて歴史を明らかにしがたい。久氏比古神社が後世に劍明神とよばれるようになったのは、おそらく石動山信仰の影響によるものではあるまいか。久江の劍山の峰続きである石動山に鎮座する五社権現の一つであつた劍宮の劍明神の信仰が、強烈に波及した結果と想われる。その御神体も、石動山と同じく世にいう俱利伽羅劍、すなわち不動明王の劍に俱利伽羅竜のまといつた神実が奉祀されていたことによつても推察されるであろう。

往時は神仏習合の時代が続いた。伝承によれば、本社杜僧に本興寺とか茶園坊とよばれる別当寺があつたが、天正年間に焼亡して退転してしまつたという。現在、ホンゴウジとよばれる地名が神社の南方、久江川を距てた台地、愛宕の森の奥にあり、五輪塔石が出土するという。おそらく本興寺址とすべきであろう。

なお、本社杜の神官には今井氏が累代奉仕した。明治三年（一八七〇）書上にかかる今井家の「先祖由緒并一類附帳」によれば、七世の祖父である出羽正宗次（寛保三年没）以下の世系を伝える。この間、明和七年（一七二九）には今井久富が従五位下・淡路守に叙任しているのである。

#### 久江村の神々

久江村には、久氏比古神社のほか八社が祀られてきた。文政十一年（一八二八）および同十二年の「杜号祭神書上帳」によれば



愛宕大明神（軻遇突智命を祀る）

貴布祢大明神（閼象女命を祀る）

諏訪大明神（建御名方命を祀る）

住吉大明神（表筒男命・中筒男命・底筒男命を祀る）

薬師大明神（少彦名命を祀る。天神宮と改称）

十王堂（国常立尊を祀る。十王社と改称）

元三大師（太玉命を祀る。櫛社と改称）

大物主社（少彦名命を祀る。愛宕社内に相殿として奉斎）

と見える。ただし、文化三年（一八〇六）の「久江村巨細帳」（鹿島町尾崎区有文書）には、大物主社がなくて  
 釈迦堂をのせている。このうち愛宕大明神は、久氏比古神社と並んで久江村の氏神と仰がれ、近世末期に  
 久氏比古神社に合祀されたことは後述する。その他の七社は、小祠として信仰をあつめてきたが、貴船・  
 諏訪・櫛（元三大師）の三神社は、明治以後に久氏比古神社の境内社となり、現在は社務所内に奉斎されて  
 いることは初めにしるしたとおりである。なお、薬師・大物主・住吉・十王の四社は廃社となったよう  
 である。

## 愛宕神社

この神社については、文政十一年（一八二九）九月の「社号別帳書上帳」に

一、愛宕大明神

久江村御鎮座

祭神

軻遇突智命

祭日

六月廿四日

右当社者私奉仕之社ニ而、代々継目及先代官位昇進仕罷在、則御奉行所之御添翰及吉田殿御裁許状ニ茂愛宕・久氏彦神社両  
 社之神主と有之候処、如何成沢合ニ候哉、宝曆年中御改之御書洩候哉、以来右両社ハ私奉仕社と加書指上申度奉存候ニ付、

村江久郡島廣國登能縣川后  
社 殿 内 式 座 鎮  
景之社神古比氏久

KUTEHIKOUJINSHA  
Kashimogun Noto



本社ハ久延氏古神ヲ祀リ天目一箇  
命ヲ合祀ス創建ハ今之ヲ詳ニゼサ  
レト社記ヲ按ズルニ古賀萬代穂ノ  
朝 崇神天皇ノ皇子大久杵命當國  
ニ奉陪シ給ヒタル時侯宮ト速カラ  
カリケレバ常ニ当社ノ大神ヲ尊崇  
アラセ給ヒ敬禮極メテ斷重アリシ  
ト又 元正天皇養老二年泰澄法師  
石動山天平寺ヲ開カシメニ本社  
ニ祈願セラレ護摩ヲ焚キ劍舞ヲ  
為セリト故ニ蘇ノ宮蘇大明神ト  
モ稱ヘ拜殿ヲ奉置トモ名ケリ又  
養老ノ天平字六年卯辛  
寅年當國大早國司厚ク幣帛  
ヲ降ケテ祈願一七日大雨忽  
ナ地ニ溢レ水穀穂ヲ生シタ  
リト云フ 延喜天皇延暦  
四年國司勅ヲ奉シ儀屬  
ヲ率ヘ本社ニ詣テ五穀  
豐熟ヲ祈ル云々又 清  
和天皇貞觀元年勅使ヲ  
以テ別格ノ御位階ヲ進  
メラレ同八年國司勅ヲ  
奉シテ幣帛ヲ奉レリ  
又醍醐天皇ノ朝廷嘉式  
ニ登史セラレ 前年奉幣  
ノ祀アリ且民部官公麻雅  
福中修理池滿科一万束救急  
料六万束ノ内ヨリ毎歲百分  
一本社ニ納メラレ三月十一二兩  
日前年祭ノ記科ニ充テレ永ク例規  
トナシシモ中古以來其制漸ク弛緩シ  
カ比久延一帯ノ人民ハ全向同日ヲ以  
テ齋戒沐浴本社ニ參集シ五穀ノ餘糧  
納メテ神前ニ捧ケテ五穀豐熟ヲ祈リ其  
祭科ハ水白尾崎久延縣北四村ノ年貢米  
中ヨリ出セリ是即チ 醍醐天皇朝規ノ遺  
格ナリト抑モ本社ハ往古兩部ニテ神主  
久遠氏現令氏同本具寺等七堂伽藍ノ壯  
觀ヲ極メ至リ書等多カリシモ  
善承天皇ノ比應兵災ニ罹リテ悉  
ク灰燼ニ帰シ規模大ニ縮小シ明  
治維新ニ至リ神社ニ昇格セタリ  
即チ大ニ土功ヲ起シ維持ノ方法  
ヲ施シタリ

相殿後岩神社ハ祭神輿安神城ハ  
舊神トシテ天保二年神勅ニ依  
リ旧社地ヨリ本社地ニ遷祀ス社  
記ニ 敬達天皇ノ朝百濟日羅ノ  
天皇ノ記トモ又 清和天皇貞觀  
二年橘本祝儀正ノ創立トモイフ  
本社ノ宝物ニ水像ノ新渡大尉  
長刀ノ新渡大尉神像ノ新渡大尉  
德俊公神像及古刀ノ新渡大尉  
等ナリ

本社ノ社司今井辰廣氏ハ久延  
氏古神ノ後裔久延氏ノ子孫ニ  
シテ累代勤仕今ニ至レリ

明治卅年十一月刻  
ト云フ  
後岩古神社影繪製所

今般別帳ニ奉願上候

としるすごとく、例えば享保十八年（一七三三）の神道裁許状にも

能州鹿島郡久江村愛宕・久氏比古神社両社之神主今井出羽守藤原宗次

と見え、久氏比古神社とならんで久江村の氏神と仰がれてきたのである。慶応四年（一八六八）の「社号書上申帳」の愛宕社の条に

往古両部三而七堂伽藍有之、数坊有之内、本興寺与申寺号相知居申候、其節者神領多御座候由、天正年中兵乱之砌、度々回録村之立券状・旧記も焼失仕候由申伝江候、

と述べているのは前述した本興寺についてであるが、この社僧は愛宕神社関係のものであったのかもしれない。

想うに、愛宕神社は、古代の久氏比古神社に代つて抬頭した新しい神社と見るべきであろう。森田平次の「能登志徴」の久氏比古神社の条に

此久江村は戸數纔に百七十余戸なれど、半ば同村の愛宕社を氏神とす、此愛宕社は村落より三町計寅卯の方にて、此社も岡上にあり、然に安政年中、此社地へ移転し、夫より両社並べり、

と述べているとおり、もとは、久氏比古神社の南方、久江川を距てた台地、愛宕の森（愛宕谷内）に鎮座して久氏比古神社に相對していたのである。その本地仏は勝軍地藏で、現在は久氏比古神社に奉齋されている。また、祭日は、久氏比古神社が三月十二日・八月十二日であるのに対して六月二十四日だった。「笠ノ本ノ祭」とよばれたという。

しかるに、どんな理由があつたのか明らかでないが、愛宕神社は久氏比古神社に移転合併するにいたつた。その年代を前記の「能登志徴」では安政年中（一八五四―一六）とするが、社伝によれば、天保十年（一八三九）、神託によつて遷座して久氏比古神社の相殿に奉齋するようになったという。しかし現存の棟札によ

今般別帳ニ奉願上候

としるすごとく、例えば享保十八年（一七三三）の神道裁許状にも

能州鹿島郡久江村愛宕・久氏比古神社両社之神主今井出羽守藤原宗次

と見え、久氏比古神社とならんで久江村の氏神と仰がれてきたのである。慶応四年（一八六八）の「社号書上申帳」の愛宕社の条に

往古両部三而七堂伽藍有之、数坊有之内、本興寺与申寺号相知居申候、其節者神領多御座候由、天正年中兵乱之砌、度々回録村之立券状・旧記も焼失仕候由申伝江候、

と述べているのは前述した本興寺についてであるが、この社僧は愛宕神社関係のものであったのかもしれない。

想うに、愛宕神社は、古代の久氏比古神社に代つて抬頭した新しい神社と見るべきであろう。森田平次の「能登志徴」の久氏比古神社の条に

此久江村は戸數纔に百七十余戸なれど、半ば同村の愛宕社を氏神とす、此愛宕社は村落より三町計寅卯の方にて、此社も岡上にあり、然に安政年中、此社地へ移転し、夫より両社並べり、

と述べているとおり、もとは、久氏比古神社の南方、久江川を距てた台地、愛宕の森（愛宕谷内）に鎮座して久氏比古神社に相對していたのである。その本地仏は勝軍地藏で、現在は久氏比古神社に奉齋されている。また、祭日は、久氏比古神社が三月十二日・八月十二日であるのに対して六月二十四日だった。「笠ノ本ノ祭」とよばれたという。

しかるに、どんな理由があつたのか明らかでないが、愛宕神社は久氏比古神社に移転合併するにいたつた。その年代を前記の「能登志徴」では安政年中（一八五四―一六）とするが、社伝によれば、天保十年（一八三九）、神託によつて遷座して久氏比古神社の相殿に奉齋するようになったという。しかし現存の棟札によ



# 望 遠 森 の 宕 愛

れば、左記のごとく嘉永三年（一八五〇）のことと思われる。村方一統が相談納得の上、同年八月二十九日清祓、同夜正遷宮をして、久氏比古神社の本殿と並立して奉斎、翌三十日

（表）

嘉永三庚戌年能登国鹿島郡久江村鎮座  
奉 転 地 同 所 祭 愛宕大明神御本社  
八月 廿九日清祓 同 夜正遷宮  
同三十日慶賀 今井神主出雲正藤原定則

当社愛宕大明神は 肝煎助左工門 木挽源次郎  
從往古阿たご谷内と申所に 組合頭平右工門 同 九助  
鎮座ニ候然処村方一統相談 同 平兵衛 同 小助  
納得之上此度御本社此所へ 同 次郎兵衛 大工助右工門  
（裏） 移シ奉り御両社並天奉斎者也 長百姓久右工門  
嘉永三年庚戌秋吉日 同 次左工門  
同 升右工門  
同 藤左工門  
同 藤子中

に慶賀祭をしたとあるから、かなり大規模な祭儀をしたことがわかる。また、この時に久氏比古神社の本殿に覆屋をした旨の棟札もあるので、現在の久氏比古神社の姿は、この年に基づくものと考えられるのである。神紋も丸に三鱗と

矢車とが用いられている。前者は劍神社のものであり、後者すなわち矢車は愛宕神社の紋である。こうして両社が合併後、春秋の祭日は劍神社に従ったようである。もつとも愛宕神社の祭日だった六月二十四日は、明治になってから七月二十四日となり、夏祭として知られたが、指定神社の制度ができてから久氏比古神社の例祭日となった。もって久氏比古神社における愛宕神社の比重の大きいことが知られるであろう。

### 道閑の鎮守社といわれた櫛神社

特記しなければならぬのは、もと大師社(堂)、あるいは元三大師とよばれた櫛神社についてである。文政十二年(一八二九)に神主今井河内が能州杜家触頭を通じて寺社奉行へ提出した「杜号別帳書上帳」によれば、園田道閑の鎮守社だったとされているのである。すなわち

一、櫛

社

同村(久江)御鎮座

祭 神

太玉命

祭日 十一月廿三日

但、此社ハ寛文年中御郡方才許十村役相動候道閑と申者ノ鎮守ニテ、私支配仕候処、于今私之支配ニ而、則社地も御座候而未小杜茂御座候、然所、寛延二年御改之砌、元三大師ト書上候得共、宝暦年中御改ニ書洩候、右大師号於神祇道ニ有間敷義ト存候ニ付、今般櫛社と書願申度候間、以来御改之砌ハ右之通書上候様奉願上候、

とある。現在は前にしるしたとおり久氏比古神社の社務所内に貴船・諏訪の二社と合わせ祀られているが、もとは久氏比古神社の妻手すなわち東方の山下のダイシ・畠とよばれる地に鎮座した。ここは久延の森あるいは大須古ともよばれて、小祠が祀られていたのである。もし、これが道閑の鎮守だったとするならば、このあたりが道閑の屋敷地内あるいは関係地だったと思われるが、今ではまったく明らかにしたい。

大師というのが仏法臭いところから櫛社と改称したのであるが、どうして「櫛」という社名をあてたのであろうか。神主今井家の伝承をきくに、この地は久延毘古神が永く在住し給うたところであつたので、その「奇御魂」を祭つた、そういう意味から「くし」の語を用い、「櫛」の字をあてたのだという。「石川



櫛神社のあと地（ダイシ島）

県鹿島郡誌」の久江村の条で、この櫛神社について

土人 久延毘古神を大須古様ととなへ、陰曆十一月二十三日祭祀を行ふ此の日必ず雪降るといひ、世に之を大須古の隠跡といふ。

と附説している。久氏比古神社の久延毘古神が、大須古様すなわち大師様だといふのである。十一月二十三日の祭祀というのは、近年まで十二月二十三日に行なっていた。ダイシコ祭と称し、必ず小豆雑煮と二股大根（二本）とを供えて祭り、祭典後これを撤下し、小豆雑煮を大鍋に入れて一同がよばれたという。これは世に多い大師講の行事にはかならない。小豆雑煮は大師講につきものであるが、久江ではとくに二本の二股大根を供えるのが注目される。いうまでもなく生産をシンボルするもので五穀の豊穰を祈るのである。

霜月の田の神祭（アエノコト）に相通ずるものを見るのである。久江の大師様を、文政十二年の書上では元三大師（慈恵大師良源をいう。比叡山第十八世の座主で叡山中興の祖と仰がれる。永観三年正月三日に遷化したので元三大師とよばれる）とするのであるが、「能登志徴」では

彼社地（久氏比古神社）なる剣山の此方なる谷内をば、久江谷内を呼べり、此処に信賢大師堂といふあり、里諺に、信らん大師は久江のやち、生れ在所はのとのやちと唱へり、則、久江村に谷内兵衛といふ百姓あり、毎年十一月二十三日大師講とて、彼堂へ小豆粥を持行備ふとぞ、

のごとく親鸞とするのである。また今井家の伝承や鹿島郡誌では久延毘古神をあてているが、これにはわけがある。世に多い大師講の伝承には、大師様はスリコ木のような足をした一本足だとか、テンポ足の貧者が大師様に御馳走しようと食物を盗みに出たのを、大師様があわれんで足跡をかくすため雪を降らした、これがアトカクシ雪とかテンポカクシ雪なのだという伝えが多い。たまたま久氏比古神社の久延毘古神が案山子神にあてられ、したがって一本足だと思われたりしたところからテンポカクシの大師様にむすびつけられたのであろう。また、この大師様を櫛社と改称して祭神を太玉命としたのは、久氏比古神社すなわち剣明神の祭神とされた天目一箇命が天石屋戸神話で太玉命に率いられた関係から、おそらく神職の考えたものであろう。なお、鹿島郡誌には「てんば大須古」と題して、つぎの伝説を載せている。

てんば大須古。久江の人なり。或日谷内へ畠仕事に行き中食せんとするに握飯一つ畠の隅の鼠穴に転げ入れり。男は堀返りて探し求めたれども遂に見当らざりしが、午後一休みせるに、一疋の鼠あらはれ、先程は握飯を戴き誠においしうございました、何とぞ私共の処へお遊にお出で下さいといふまゝ、それでは行つて見よう、さあ私に負はれて下さい、そしてお目をつぶして下さい、私がよいといふまで決してお目を明けてはいけません、といふに、よしと目を閉ぢ、鼠に負はれしが、やがて、もう参りました、といふ声に目を開けば、あたりは真昼の如くにして壮麗なる殿作りの構なり、鼠等は、ようこそと打喜び、上を下へと混雑せるが、白いお米にて先づ御飯を上げんとて、一疋の鼠は米搗部屋にてとん／＼米を搗きしが、杵に和して「鼯かち／＼猫さへおらにや、鼠此の世は極楽や」と歌ひ囃すに、男は一つ驚かしうれんと、ニヤオンと猫の鳴声をするや否や、どか／＼物音のすると、あたりは真暗に、たゞ独冷き穴に取残されしまゝ、鼠等は何処に隠れ潜みしか、もと来し道を求めしが、道も穴もあらばこそ。止むなく地上へと土を堀り穴を穿ちてよう／＼這ひ出しが、爪は勿論指もなくなりて、てんばとなれりと。師走二十三日の朝、春祭の宿にあたる家より一碗の小豆雑煮を供ふるが、此の日必ず雨（雪）降るといひ、これを大須古の跡隠といふ。古き俚謡に「曾富勝大須古能登の人、生れ在所は久江の谷内」とあり。

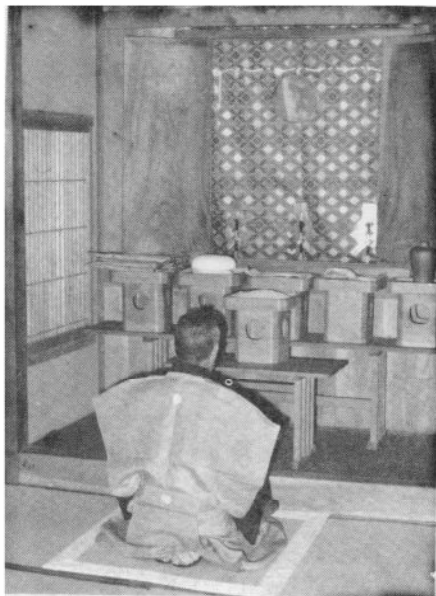


## ダイシコ祭

(昭和四十二年二月、古神の  
とおりに行なったのを撮影)

⑤ ダイシコ様のお祭り（久氏比古神社の社務所に奉祀した櫛神社の神前で）。

⑥ ダイシコ祭のお供え（向って左が小豆雑煮、右が二股大根）。



これは動物報恩譚のうち鼠浄土といわれる昔話が、大師講伝承にむすびついて伝説化したものであろう。てんば大須古が久江の人名となつてゐるのもおもしろい。

この大師様すなわち榊神社が道閑の鎮守だったと記録されているが、祭の行事は「能登志徴」にいうごとく、久江村の老百姓として知られた谷内兵衛方が主催してきたのである。道閑祭のところで詳述するように、久江の氏子が道閑・谷内兵衛の両派に分かれて道閑祭に奉仕してきたのである。その谷内兵衛派が大師講——榊神社の祭事にあたつたということは、道閑の鎮守だった点について疑問をおこさせる。こうした点については今後の研究にまたねばならないところである。

## 二、道 閑 祭（オケラ餅の神事）

### 1、神事のあらまし

#### 道閑方と谷内兵衛方

現在、久氏比古神社では、春祭が四月十一・二日、例祭が七月五日、秋祭が十月十九日におこなわれる。道閑祭すなわちオケラ餅の神事は春の本祭の前日、十一日にとめられるものである。久江の氏子が、道閑方（愛宕神社方）と谷内兵衛方（剣神社方）とに分かれ、おのおのミクジで定められた当屋の宿において餅つきをなし、大餅の飾り物を二膳こしらえる。これをオケラ餅という。また蒸し御飯を高杯状の器物に円柱形に盛りあげたものを三台ずつ用意する。これを御供様という。両当屋においてこうした神饌を調進するとともに、神職に七度半の使者を出す。迎えられた神職は神社に参向、神輿に従つて両当屋にいたり、清祓をなし、直会後に帰社する。翌朝、右のオケラ餅を神社に運んで神前に献備。かくて祭典後、神輿が村内を渡御して帰社、めでたく春祭を終えるのである。

特殊神饌のオケラ餅を献備するのでオケラ餅の神事と称し、当屋組織によっておこなわれるところから当屋祭ともいわれる。しかし一般には道閑祭の称をもつて知られている。道閑方・谷内兵衛方に分かれて奉仕するのであるが、追慕する義民道閑の名をとくに冠してよぶのである。これは他村のものの呼称に始まったということだが、今や一般化し、この神事が、あたかも道閑を祭るもののように思われているのである。道閑は、ここにも脈々と生きているといえる。

オケラ餅の神事は、大正三年までは大体において古儀を存続してきたが、同四年より簡略化して次第に形ばかりのものとなり、昭和の大戦中からは、ほとんど中絶状態にある。よってここでは

第一期 大正三年まで。

第二期 大正四年より昭和の大戦中まで。

第三期 昭和の大戦中より現在まで。

の三期に分け、第一期の古儀を中心として略述しよう。

# 当番

すでに、前条においてしるしたように、久江の住民のすべてが古来の定めによって道閑方と谷内兵衛方とに分かれる。家によつて、どちらに属するかが定まっているのである。現在、道閑方が八十九名、谷内兵衛方が九十名となっている。古いところでは、明治十四年に道閑方が五十一名、谷内兵衛方は同二十年に五十名だった。新しく分家したものは本家の所属の組に入り、他からの転入者は、両派の人数を勘案して少ない方へつける。この二組において、毎年一人ずつ当番が選ばれる。当屋（問屋と書かれている）とか当番、宿とか宿元とよばれる。前年の四月十一日、神前でミクジによつて選ばれる。その方法は、氏名をしるした紙札を三方に入れ、神職がこれに幣をたらし紙札を一枚つりあげる。それが当番となるのである。一度あたったものは、次回からはふかれる。こうして選ばれた当番は記録される。古いところでは、道閑

方が文化年間から、谷内兵衛方では天保十三年と推定されるものからの記録が存する。また、明治以後、とくに同十九年以後現在にいたるまでの名簿が完備している。これらについては、道閑祭の記録の章において略述するであらう。

## 2、神事の古儀

### 第一期

四月十一日朝、道閑方・谷内兵衛方では、それぞれ組のものが当番の宿元に集まって餅つきの準備をなす。宿元の門前には斎竹をたてる。ハバキとよばれているが、明治以後の当屋の記録では、オハケとか御羽毛とするされている。高さ二間近くの青竹で、その上部を三寸ばかり太く藁でまく。その藁のまわりを半紙で二重に巻き上方を花びら形にたらす。この藁の部分に一尺ばかりの櫛をさすのである。

これより先、各組では組内から一軒につき玄米一升六合ずつを集めるほか、村方としても何斗か買入れる。これを一同が臼でついたのであるが、精米機が発達していなかった時代は、労力と時間を費すことはなほだしいものがあつたという。つきあがると、久江川や井戸端といた。往時使用したトギ桶やツケ桶が今も神社の倉庫に存する。トギ桶では径二、九五尺、高さ一、二五尺という大きなものがあり、ツケ桶も径二、二尺、高さ一、九尺ばかりのものが数箇ある。

へおいたわしや道閑様は 七十五村の身代りに

へ久江の道閑様三人の子供 中でおしは六太夫様や（殺しかねたは六太夫様や）

これは、久江地方の臼すり唄で、神事と直接関係はないが

へおけら正直なら天まで届く 天はめでたい神の国ソクソク

へ道閑ばかりか谷内兵衛もあるぞ いずれめでたい神のことソクソク



トギ桶(中央前方)・ツケ桶(後方)と  
飾り折(左・右)

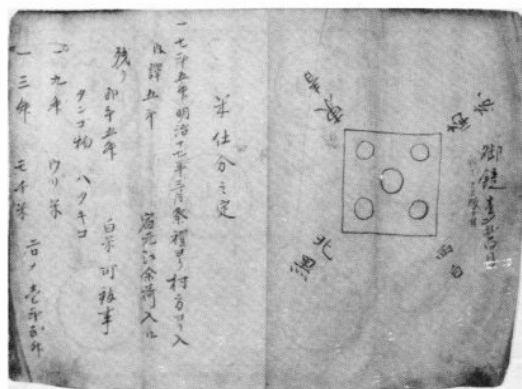
これは、米とぎの時歌われたものとして「石川県鹿島郡誌」に載せているものである。米とぎは太鼓をたたいてはやしたてたものだという。関係者は精進潔斎してあたる。身につける襦袢にしても、正月二日の針仕事始めにこしらえたものを用いたという。もとより一同は、身に祝酒が入っている。通行人や見物衆に酒の無理強いなどをして、なかなかの騒ぎだったという。

米をとぎ終ると蒸して餅つきにかかる。場所は当番の宿元であるが、新しく藁葺の小屋を建て、その土間でする例だったという。蒸し桶には径二、九尺、高さ二、八尺という巨大なものが現在神社に数箇揃っている。まるで風呂桶ともいうべきものである。餅つきは、臼を三基ならべ、たがいに競争して、にぎにぎしくついたものだという。とくに一臼をすこしも休息しないでつき得たものを、はじめて一人前の若者として待遇したという。

#### オケラ餅と御供様

餅はまず大きな鏡餅を十枚こしらえる。もとは五升餅だったのが後に三升餅になったというが、「剣社当番順名定式」によれば、一枚につき壺貫式百目とある。この大鏡餅を二、四尺四方の飾り折に五枚ならべる。そのならべ方は

劍社当番順名定式



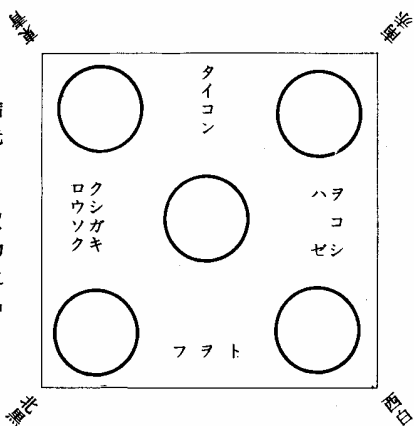
四隅と中央に一枚ずつ置くのである。さらにその餅の上に菱形の五色団子を一枚ずつ折り曲げて載せ、その上にベンチャクとよばれる猪口形の五色団子を加える。五色とは青・白・赤・黒・黄をいう。青は東、白は西、赤は南、黒は北、黄は中央というように置場所も定まっているのである。このほか、餅と餅との間に大根・山芋・トコロ・串柿・煎り黒大豆・ハゼ・丸形のおコシ・海藻・焼豆腐・笹の子・小蠟燭を飾る。これらは、時によって異動があったらしい。こうした飾り折を、両当屋で二膳ずつこしらえたのである。

御宮飾物

- |        |          |        |      |      |
|--------|----------|--------|------|------|
| 一、大餅   | 十枚       | 一、小蠟燭  | 二本   | トコロ  |
| 一、赤ヒシ  | 役餅十一     | 一、イ    | モ二本  | モウ   |
| 一、白ヒシ  | 同同       | 一、ヲコシ  | 四ツ   | ハゼ   |
| 一、黒ヒシ  | 同同       | 一、クシガキ | 四ツ   | 焼トウフ |
| 一、青ヒシ  | 同同       | 一、タケノコ | クロマミ |      |
| 一、白米式升 | 十二日ノ御ハナイ | 一、ダイコン | 四ツ   | ミゴク  |

御鏡巻ノ式百目

但し巻枚ニ付



宿元ヨリ買物之品

清 酒 巻 升 巻 せん ヒル トウフ  
 アブラ 式 合 巻 せん 夜 同  
 半 せん 宿見舞ノトウフ  
 白米式升 御ハケダチ 宿元ヨリ指出事、  
 清酒式斗五升 村方ヨリ入ル、

米仕分之定

一、七斗五升、明治十七年三月祭礼ヨリ村方ヨリ入、

内訳五斗 宿元江余荷入ル、

残り式斗五升 白米ニ可致事、

タンゴ物 ハタキコ

一、九升 ウリ米 二口ノ巻斗式升

一、三升 モチ米

ミコク

一、式升 ウリ米

一、五升 モチ米 二口ノ七升

トリコ

一、四升 ウリ米

一、式升 十二日御ハナイ

右之通取捌、ウリ米わ有合米神主様江進上事(中略)

此酒、明治四十三年ヨリ式斗トス、

宿元での用意は、右の飾り折だけではない。御供様を三台つくる。木製高杯状の器物（高さが五、二寸、直径六、五分、深さ一、三寸ばかり）に蒸し御飯を円柱形に盛りあげ、そのまわりを新しい藁で巻きつけ、蒸し御飯の中央に箸としてニワトコの木を二本つきさしたものである。このほか餅をたくさんついて、一同がこれを食べたり頒けたりし、自宅へも持ち帰るのである。村方からは酒が二斗五升（明治四十三年からは二斗）用意される。また祝酒といって有志からの寄附もあったから盛況のほどが思いやられる。一例として明治三十二年の道関方の記録である「愛宕社御鏡米領納帳」を見るに

祝酒 等

一、式升 七尾 道関屋

一、壺升 四郎三郎

但人夫出ル分

一、壺升 谷内吉太郎

同

一、壺升 松村力太郎

同

谷内兵衛分 四十二才祝酒

一、式升 理右エ門

一、壺升 市三郎

一、壺升 五郎左エ門

とある。このうち、七尾道関屋というのは、道関の子孫といわれる家で、毎年、この道関祭に招待される



慣例で、道閑屋はその時に祝酒を出すのであった。村では、この返礼として必ずオケラ餅を贈ることになつてゐた（道閑屋が七尾で金具師を営んでいたことは、現在鹿島町最勝講の天神社にある旧石動山五社大権現の神輿の裏墨書に「金具師所口塗師町住人道閑九左エ門」と見えることによつてもわかる。この神輿は安政四年修葺のものである）。

なお「能登志徴」には、久江祭としてこの道閑祭につきのような解説をしており、参考となるので掲げることとする。

中にも三月の祭礼は、神事の前日両産土子東西へ別れて集会す。是は前年の祭日に御闕を取て集会の家を定む。さて家毎より餅米を一升五合充持出、其日春て白米となし鏡餅に製す。又五色の団子を造りなし、又大根二切、山薯一本、蕪二切・串柿・焦黒大豆・榎・丸形のおこし、各五つ、海藻一筋、焼豆腐二切、笹子一把、蠟燭二挺、以上十三種を四尺計の木具に飾なし、東西同様二膳宛、又御供一斗六升充をモスソ盛になし、接骨木二本を上にし添、わさ蕨をもつて七処結びなして、東西より三膳宛、十二日の朝神前へ備へける。さて神事畢て後、鏡餅等飾りたる神饌を、四膳は神官へ、二膳は村方へ一膳宛配分し、御供は三膳神官へ、二膳は村方へ一膳宛。各頂戴して直会する古例なりとぞ。

#### 道閑方・谷内兵衛方の対立

不思議なことに、この神事の日にかぎつて道閑方・谷内兵衛方の仲が悪く、しばしば、いさかが見られるのであった。肉身の親兄弟であつても、もし婿や嫁になつて他の組へ行けば、たがいに反目して喧嘩をなす。喧嘩というても、いわゆるいたずらで、それがまたおもしろかつたのである。古老はつぎのような挿話をもの語るのである。

すべてこの神事は、道閑方が初めに行事をなす慣例となつてゐる。そこで道閑方が何かにつけて威張る。米ときにおいても、まず道閑方がはやしの太鼓を使用する。あとで道閑方へ太鼓をとりに行く谷内兵衛方では迷惑はなほだしいものがあつた。道閑方が太鼓をかくしてわたさない。探し出して持つて行こうとすると、酒の勢でドンとつく。はずみをくらつて傍らのトギ桶に足が入る。といだらかりの米が入つてゐる。

のだ。神様のものに泥をつけたといつて大騒動になる。その翌年、道関方では谷内兵衛方のトギ桶に泥足を入れて意趣がえしをなす。といったように、十一日だけは奇妙に仲が悪かったという。

### 七度半の使者と宿元での神事

宿元において飾り折や御供様が調進されている最中に、両当番から神職の居宅へ七度半の使者を出す。まず道関方の使者が袴姿で出むき、用意がととのつたことを述べて宿元へ参向方を乞うのである。つぎに谷内兵衛方の使者が訪れて同様の旨を述べる。かくて七度、神職は初めて装束を着用して神社へおもむく。その途中、使者に遭遇するので七度半の使といふのである。

神職は二人の使者をつれて神社にいたり、祭典をあげて神輿に神わたしをなす。道関方のものが神輿をかついで道関方の宿元にいたる。宿元ではオケラ餅等を飾り、これを神職が清拭し、続いて明年度の当番をミクジで選定、当籤者にはその旨を通知、つぎに直会となる。ついで谷内兵衛方の迎えがきたり、神輿が渡御して道関方と同様の儀をなす。ついで、両当屋はたがい訪問して祝意をのべることに、きわめて厳格なものがあつたという。終れば、両派の総代が供奉して神輿が帰社するのである。そのあと宿元では当番が飾り餅等の守護をなす。新しく当番に選ばれたものは、当日の夜、厳密に言えば、十二日の午前零時を期して今までの当番と交替して守護にあたるのである。

### 本祭の儀

十二日は本祭である。この朝、両当の宿元からオケラ餅等を神社へ運んで神前に献備する。若者が飾り折の膳を頭上に載せて運ぶのである。ここにおいて初めて道関方・谷内兵衛方の対立が解けて仲よく平常にもどり本祭の祭儀が奉仕されるのである。祭典後、神輿が村内を渡御する。新当番は袴姿でお櫛を捧持して神輿にさきだつ。渡御の時、神輿を御招待する家が三、四十軒ある。神輿はその家の前にとどめられ、お櫛がその家に入って小祭が奉仕される。かくて夜に入ってから神輿は帰社して春祭が終るのである。

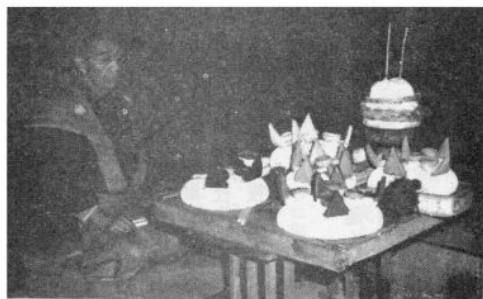
# 道 閑 祭

（昭和四十二年二月、古儀のとおり行なうたのを撮影）

① 七度半の使（当屋の宿元を出るところ。入口の左右に立つ斎竹がハバキすなわちオハケである）。



② オケラ餅と御供様を献備する当番。



③ 飾り折のオケラ餅（左）と御供様（右）。



# 当わたし

新旧当番の間におこなわれる引継ぎ、すなわち当わたしの儀については明らかでないが、当番は毎年、帳簿に記録をのこす例となっていた。道関方ならば「愛宕社御鏡米領納帳」、谷内兵衛方ならば「御祭礼飾物出来人別調理帳」という長帳である。前者は明治十四年から同四十一年まで二十三冊、後者は明治二十年から同四十年まで十八冊をのこしている。鏡餅の米を納めた組員の名簿であるが、これに引継関係の記事が見える。例えば道関方でいえば、明治十九年（宿元は益野佐次右エ門）には

十一日神官ノ振舞膳上、是迄之しみかんヲ魔シ、料理酒モ魔シ、悉皆宿本之在合ナリ、十二日世話人ニハ宿本ヨリ酒老升ニとふ半せん、此外、宿本ヨリ差出ス事ヲ禁止ス、

といった規定のつきに

明治十九年四月十一日佐次右エ門方ニ而仲間持枕之内、小枕老ツ紛失致候故、為後ノ記載仕置、とするす。その後、紛失の小枕が出てきたと見えて、右の記事のあとに

右ニ小枕老ツ紛失ノ由記載致有之候得共、其后該小枕ヲ見出し金ふ仕候也、但、高柳孫左エ門宿本ノ時記ス、とするす。七年後の明治二十六年のことであった。なお明治十九年の記録には道関派の財産目録が掲げられており参考となる。

## 道関派財産

### 目録

一、四拾人前	家具
一、拾枚	折
一、拾貳枚	板御前
一、三個	半切
一、貳個	定木尺

一、 甕 個 ソウハマ台  
 一、 甕 個 蒸 桶  
     但、マス付  
 一、 甕 個 米 浸 桶  
 一、 甕 本 大はんかい  
 一、 甕 本 餅 延 木  
 一、 甕 個 升<sup>三十五年</sup>四月十二日  
 一、 蒸 桶 甕 個  
 一、 帳 箱 甕 個<sup>卅六年</sup>四月十一日  
     但、蓋付  
 とある。この末尾にある帳箱は、今日も記録入れとして使用されているもので、長一、四八尺、幅六、四寸、高き三、九寸、その蓋表には「記録 愛宕社事務所」と墨書し、裏面に「明治三十六年四月十一日」としるす。

つぎに谷内兵衛方の例として明治二十一年（当番宿は上田三郎四郎）の調理帳を見ると

子ノ四月十一日ヨリくわいけのこり

一、四十銭あすけ 上田三郎四郎ヨリ

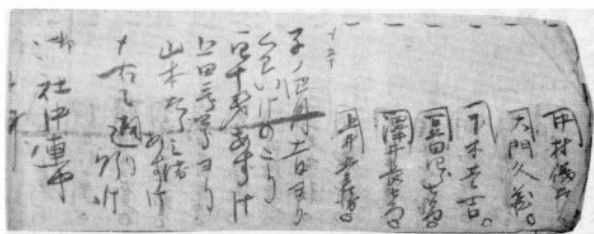
山本太郎兵衛あすけ

メ右之通預け、

御社中連中

相 済

とあるのは決算報告であらう。また同三十四年のものには



# 明治21年の決算

もく六書

一、四ツ	椀	四十人
一、板御せん		拾二枚
一、トギ	桶	三ツ
一、ムシ	桶	壹ツ
一、米ヒヤカシ	桶	壹ツ
一、はかり		壹ツ
一、ヘ	シ	四枚
一、丸ぞ	け	壹ツ
一、マ	ク	壹ツ
一、折		拾枚
一、酒上	ゴ	壹ツ

右之品御渡し候也、

明治三十四年四月十二日

石田重蔵

谷口 清平殿

といった当わたしの記事が出ている。なお献備されたオケラ餅は、祭典後に神職と村方とに配分されたが、前にもしるしたように道閑の子孫である七尾の道閑屋に贈られたほか、神職今井家と姻戚関係にあった久江の願成寺へも届けられたのである。

### 3、神事の推移

#### 第二期の神事

大正四年から昭和の大戦中までである。大正の初期から全国的にひろまった生活改善運動が久江村にも波及し、オケラ餅の神事を改変するにいたつたのである。それまで道関方と谷内兵衛方との二つに分かれてつとめてきたのを、一つに合同しておこなうことに改めたのである。久氏比古神社の境内にある社務所を宿元に見たて、久江区长のもとに両当が仲よくつとめることにしたのである。ミクジによって当番を選ぶことは従前どおりであつたが、両当が一体となつて社務所でオケラ餅の調進にあたるということは、まことに大きな変革といわねばならぬ。その上、オケラ餅は小規模となり、大餅のごときも二升五合餅となつた。また両当が二膳ずつこしらえてきたのを一膳ずつとした。これに要する米も、家々より一升五合ずつ集めてきたのをやめて村から二俵すなわち八斗を出し、村人足によつて調進することに改めたのである。したがつて従来のように宿元でたくさん餅をついて一同が食べたり持ち帰ったりする慣習も廃止された。かように根本的な変革がおこなわれたのであつたが、七度半の使は存続した。迎えをうけた神職が神社におもむいて祭典をあげ、お禰を社務所へ奉遷して清拭をした後、つぎの当番をミクジによつて選んで直会、その夜十二時から新当番が飾り餅を守護し、翌日の本祭行事を旧のとおりとめた。かようなやり方が昭和になつても続けられたのであるが、戦争が苛烈となり、主食の配給制度が強化されてくると、右のような略儀すらおこなえなくなつてきたのである。

#### 第三期の神事

この時期すなわち昭和の戦中戦後は、形ばかりの祭儀をおこなうだけとなつたのである。当番だけは道関方・谷内兵衛方とミクジによつて選ぶが、区長が中心となり、伝統を有するオケラ餅は全然つくられず、

斎場も社務所から転じて神社の幣殿と拝殿とにおいて執行されることになったのである。つぎに、昭和二十五年の実地参観にもとづいて大略をしるそう。

四月十一日、久江区长と二人の当番が神社において祭典の準備をなす。まず拝殿前方にある石階の下左右にハバキ（オハケ）をたてて精進潔斎のしるしとなす。このハバキは神職に作製してもらうのである。両当はおのおの普通の鏡餅一重と御供米一升・神酒一升を準備するほか簡素な直会（ちくわい）の支度をなす。区長は道関方・谷内兵衛方の当番を選ぶミクジをつくる。氏名を記入した紙札である。

午后三時すぎ両当は神職の居宅へ七度半の使となつて出む。まず道関方が袴姿で神職を訪れ、その居間に通つて

「旦那様、いいお天気でございます。だんだんと準備も進みましたから、お出まし願います。」

と挨拶。雨天の場合でも「いいお天気」という慣例だという。これに対して神職は

「そうか。どこまで用意ができたか。」

「はい、もう、すっかりできました。」

「それでは、支度をして、いい加減に出かけるぞ。まあ、お茶でも吞んでいきなさい。」

「はア、いろいろ支度もありますので、これで失礼します。」

「それでは、ご苦労様。」

というような応答がかわされ、当番は辞去する。しばらくたつて、今度は谷内兵衛方の当番が同様の服装をして神職を訪れ、前と同じ応対がある。双方かような儀をくりかえすこと三度。四度目に道関方が訪れて挨拶をすれば、神職は烏帽子・狩衣を着用、笏（しやく）を持つて居宅を出る。道関方当番が随従する。その途中、迎えにくる谷内兵衛方当番に会うのである。ここにおいて神職は二人をつれて神社へ参向する。これが七度半の使だとされる。



神社では区長と走りのものが待ちうけ、挨拶がかわされてから祭典が始まる。神職は幣殿、区長と両当番は拝殿に着座。まず修祓、つぎに開扉。お櫛に神わたしの儀をなし、神職は本殿からお櫛を捧持して退下、これを道閑方当番にわたす。道閑方はこれを幣殿右側に設けられた案上に奉安する。すなわち、この所を当屋（みや）の宿元と見たてて神儀がここに渡御した古儀をかたどるわけである。

つぎに神職は、右のお櫛の前に両当番からの鏡餅・御供米・神酒等を献備し、大祓詞に続いて祝詞奏上となる。この年もオケラ餅のごとく豊かに五穀のみのらんことを祈願。神職の玉串拝礼後、区長・両当が拝礼、「おめでとうございます」と神職の挨拶がある。道閑方宿元における行事に該当するわけである。つぎに神職によつてミクジの行事がある。まず道閑方の名札を入れた三方に幣を垂らして一枚をつりあげる。つぎに谷内兵衛方のミクジをなす。かくて新しく選ばれた当番宅へ走りが当籤の旨と来社方をつけに出かける。つぎに神職は、お櫛を執つて谷内兵衛方当番にわたす。谷内兵衛方はこれを受けて改めて神職に返す。谷内兵衛方における行事をかたどるのである。神職はお櫛を本殿に捧持して神わたしの儀をなし、閉扉して祭典を終え、直会となる。

その頃、当籤者が来社すると、一同は「おめでとう」と祝意を表し、区長よりミクジの名札をわたす。かくて当籤者をまじえて祝宴が始まるのであるが、きわめて簡素なもので、定めの御馳走は奴豆腐と山ウドの二品が必ずつくのである。以上をもつて十一日の儀を終え、翌十二日の午后、神輿が村内を渡御し、新当番がお櫛捧持の所役をなすことは従来と変らない。

#### 4、神事の由来と特徴

##### 神社の由緒にもとづく当屋祭

久江の氏子が道閑方・谷内兵衛方の両派に分れて奉仕する道閑祭は、どんな由来にもとづき、またそれ

が、どのような特徴を有するであろうか。これを正しく理解するためには、すでにするした久氏比古神社の由緒・来歴に思いをいたさねばならないであろう。久氏比古神社（剣神社）が、愛宕神社を合併した複合体の神社であることを、まず知るべきである。従つて、道関方が愛宕神社方、谷内兵衛方が剣神社方とよばれるのは、道関方が愛宕神社の氏子であり、谷内兵衛方が剣神社の氏子だったからと見なければならぬであろう。この両社においては、それぞれ当屋組織によつて祭祀をおこなつてきたが、両社合併後も旧慣を変えずに神事を奉仕してきたのである。

両社の合併は、棟札によれば嘉永三年のことだった。それ以前から当屋組織による祭祀をしてきたことは、神職今井三澄の覚書である明治八年の「年中行事諸事調方」によつてわかる。道関方では同書の「愛宕社ノ方当番相済覚」に「先年シレズ伊兵衛、巳年彦三郎」より始めて明治十九年戌年の三次右エ門まで五十六名を年順にしている。中途に脱落があるため正確には逆算できないが、最初の「巳年彦三郎」は文化二年（一八〇五）ではなからうかと推定せられる。また谷内兵衛方では同書の「久氏比古神社ノ方当番相済覚」に「先年シレズ」として平田以下十二名を掲げ、続いて寅年久六より明治十九年戌年の四郎右エ門まで四十一名を列挙している。最初の「寅年久六」は天保十三年（一八四二）と推定される。いずれも愛宕神社が合併された嘉永三年（一八五〇）前のことに属する。

久江村の氏神は、古くは久氏比古神社（剣神社）だったにちがいないが、いつの頃よりか愛宕神社が創祀され、やがて地域神と仰がれるにいたつたのではなからうか。それは、おそらく久江の発展にともなうものであつたらう。久氏比古神社が久江川の北岸の丘上に鎮座するに對して愛宕神社は南岸の台地に鎮座し、両社は久江川をはさんで南北を守護することになったのである。愛宕神社が久氏比古神社とならんで氏神と仰がれるようになったのは、愛宕神社を奉ずる有力者が出現したからであろう。その有力者が道関の祖であつて子孫の道関が愛宕神社を代表するものだったと見られるのである。

これに對して、谷内兵衛は久江の草分けの大百姓として久氏比古神社（劍神社）を奉ずるものの首長だったのである。谷内兵衛の裔である谷内家所蔵にかかる延宝八年（一六八〇）の証文によれば、當時四十六石余の草高を有していたことが知られ、文化六年（一八〇九）久氏比古神社拝殿再建の棟札には長百姓とされるされている。おそらく肝煎にもしばしばなつたこともあるだろう。「石川県鹿島郡誌」では、久江村の旧家として谷内兵衛をあげ

本村の旧家にして、往時は勢威ありしといふ。道閑十村役となりしより肝煎役を勤め相俟つて勢力あり。

としるしている。谷内兵衛に對する園田道閑は、同書に

園田家の祖は河内国の人なりしが、故ありて能州に來り、久江村に居す。而して村人に物教へなどせりと。其の子孫に至り十村肝煎となり、良剛様より百間四方の屋敷を賜りし事あり。次で道閑の世に至り、長家領十村五人の頭役となり、勢威ありしも……

としるす。その祖が河内国より來住したという年代はわからないが、おそらく中世末期のことではなからうか。道閑の菩提寺だつた鹿島郡能登部の真言宗長樂寺の過去帳に徵するに、道閑関係のものとしては、道閑とその妻・娘のほか道閑の父の名が見えるだけで、それ以外のことは知られない。ともかくも、中世末期より次第に成長して有力な土豪となり、氏神として愛宕神社を奉じて道閑の代におよんだのであろう。愛宕神社が、あるいは道閑の祖の創祀するところだつたかもしれない。また愛宕神社関係の杜僧だつたということも考えられるが、もとより明らかでない。

道閑が、慶安四年（一六五二）鹿島半郡の十村頭となり持高三百石とまでいわれるくらいの勢威を有するにいたつて、愛宕神社は隆昌をきたしたであらうが、道閑の死後は衰微をまねき、劍社すなわち久氏比古神社の下にたち、ついに合併せられるようになったものと推測されるのである。合併の事由については、村落内の融和のためだつたともいわれている。

神社の祭事は、古来、伝統が重んぜられる。両社は合併後も旧にかかわらず当屋組織による神事を営んできたのであったが、道閑を義民として追慕する念が高まるにつれて、愛宕社方は、氏子の首長だった道閑の名を冠して道閑方とよばれ、やがて、このオケラ餅の神事をも道閑祭と呼称し、道閑そのものを祭る神事であるかのように思われてきたのである。

この神事において、当日にかぎり両派が反目仲たがいし、ややもすれば喧騒にわたるといふ点について諏訪藤馬氏は

おけら餅の神事を以て名高き久江の春の宵祭、神前に供ふる餅をつくる其の日に於ける道閑派、谷内平派の競ひ争ふ風習の如き、十村道閑と肝煎とが村内に於て相対立し、浦野派・非浦野派として反目せる余風にあらざるなきか。これもとより私見に過ぎざるも、久江の隣村にして然かも小村たる水白の老が一味に加担せざりしが如き、頗る注意すべきことなり（石川県鹿島郡誌「道閑事件に就きて」）。

と論じられた。これは道閑事件をもって、長家の老臣だった浦野孫右エ門一派の扇動に踊らされて検地反対の運動をおこしたものだとし、農民のすべてが道閑に賛成ではなく、村内においても対立が見られた当時の事実が神事に反映したものと見るのである。しかし、たとえ事実がそうだったとしても、これをもってただちに神事に反映したとするのは、やや、うがちすぎの見解だとしなければならぬ。神事にあっては、旧来のままに当屋組織をもって奉仕してきたのであって、その対立的意識のごときは、わが氏神祭を重んじて他よりも盛大にしようとしたところに発するのである。ただし、神事の運営において、道閑方すなわち愛宕社方をもって先とする慣例が存したのは、過去において、愛宕社が優位にあった時代を反映するものであることは否定できないであろう。

### 神事の意義および特徴

道閑祭すなわちオケラ餅神事は、当屋組織をもっておこなわれる祭事であって、上述のごとく複合体で

ある神社の由緒にもとづき両派に分かれて奉仕される点が、まず特徴の一つとされよう。この当屋は、両派とも村民が平等に一年一人ずつ選ばれて神事にあたり、その派のものが協力して営み、その間に封鎖的な習俗のごときものを見ないのは、かなり進んだ形態であるといえよう。

つぎに特殊神饌であるオケラ餅を調進して献備する意味は、かように美事な大餅のごとく五穀が豊かにみどり、天下泰平ならんことを祈るのであつて、祭祀の性質としては祈年祭に属するもので多分に予祝的性質もあろう。オケラ餅の名称については、何等の伝承もない。今後考究せらるべきものの一つであらう。つぎに当屋の宿元にたてるハバキはオハケともしるされており、精進潔斎を示す斎竹のごとく見られているが、その間に古義をさぐることもできるようだ。すなわちハバキをたてた当屋へ、本祭の前日に神輿が渡御して清祓の祭儀をおこない、直会後に婦社し、翌日本祭を奉仕する形式をとるが、これは後代の姿であつて、もとは当屋において氏神を奉斎し、本祭の前日に神社へ奉遷して祭典をあげた時代があつたかもしれない。口能登地方では他に例を見ないものとして注目されるのである。

### 三、道閑祭の記録と当屋一覽

#### 1、諸記録の解題

道閑祭は、古来はなはだ重んぜられてきたところから、これに関する記録が久江区や当屋において保管されてきた。現在も明治三十六年調製の記録箱に納められていることは、前にしるしたとおりである。以下これらの記録について簡単に解説を加えたい。

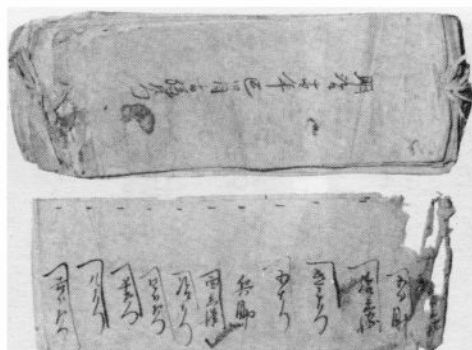
#### 1、剣社当番順名定式 一冊

中判で袋綴、表紙に「明治十八年御開改・剣社当番順名定式」、表紙裏の見返しに「御祭礼飾物出来人足調理帳 細工人久島平太郎」としるす。初めに、神前の飾り物および米仕分方・剣社道具・宿元の買物

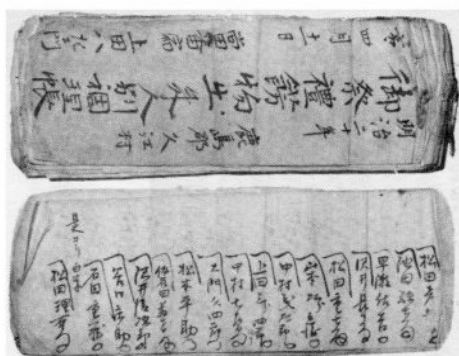


## 道閑祭の記録(2)

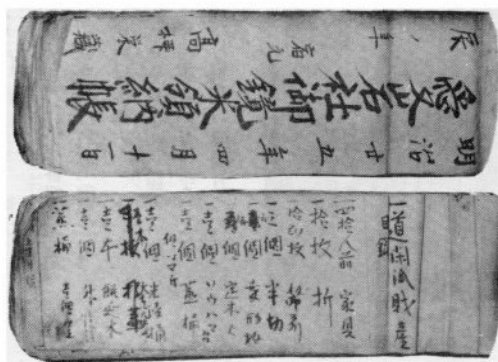
⑤ 明治十四年の道関方の記録。



④ 明治二十年の谷内兵衛方の記録。



⑦ 明治二十五年の道関方の記録。下は道関派財産目録。



等についてしるし、続いて明治十九年から昭和十三年にいたるまでの谷内兵衛方（剣神社方）・道閑方（愛宕神社方）の当番（宿元）人名を年ごとに記載する。明治十八年に、当番が一まわり終って翌十九年から新しく始まったので、かように帳簿を改めたのであろう。

## 2、県社久氏古神社問屋飾餅出来記帳 一冊

中判で、初めに頭（当番）の負担分・村方よりの余荷分をしるす。以下大正十四年から昭和三十七年までの問屋（当屋）名をしるす。

## 3、問屋御神籤人名簿 一冊

半紙判の野紙にしるしたもの。昭和二十九年三月の新調にかかる。初めに愛宕社神籤人名簿として道閑方の八十九名をしるし、当籤者には、その年月を氏名に傍記する。つぎに剣社神籤人名簿として谷内兵衛方の九十名をしるし、前を同じく当籤者には年月を傍記している。関係記録のなかで、もつとも新しいものである。

## 4、愛宕社御鏡米領納帳 二十三冊

長帳で、明治十四年から同四十一年までの二十三冊を合綴する。明治十五・十八・二十一・三十一・三十七・三十八・三十九年のものを欠く。そのうち三十一年は凶作のため、三十七年は日露戦争のため当屋を設けなかったものである。この領納帳は、道閑方においてオケラ餅用の米を出したものの人名をしるしたものであるが、そうした人名だけでなく、必要に応じて、取きめ事項や備品目録・引継事項・祝酒の寄附等の諸記録をとどめているので参考となる。

## 5、剣社御祭礼飾物出来人別調理帳 十八冊

長帳で、明治二十年から同四十年までの十八冊を合綴する。ただし明治三十七・八年を欠く。ほかに明治四十五年の断簡がある。谷内兵衛方の記録で、内容は(4)と大体同じである。





嘉永5子	安政1寅	2卯	3辰	4巳	5午	6未	万延1申	文久1酉	2戌	3亥	元治1子	慶応1丑	2寅	3卯	4辰
和兵衛	なし	三右士門	平助	久八	長右工門	善左工門	喜兵衛	九助	文吉	助兵衛	利右工門	四郎右工門	重太郎	新左工門	太郎兵衛
次郎八	なし	文次郎	治兵衛	次郎左工門	伊右工門	源次郎	武兵衛	与四右工門	四兵衛	吉兵衛	吉五郎	善五郎	佐兵衛	平五郎	嘉十郎
															儀兵衛

2、道閑祭当番(当屋)一覽(明治後)

年	明治2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
劍社方(谷内兵衛方)	増右工門	なし	重左工門	庄助	利右工門	助左工門	平六	三郎四郎	久次郎	庄兵衛	平四郎	重藏	久四郎	仁左工門	五左工門	小平	久次郎	豆田四郎右工門
愛宕社方(道閑方)	市右工門	なし	八右工門	三郎右工門	兵左工門	五郎助	兵助	文右工門	又四郎	次右工門	宗七	嘉左工門	孫左工門	宗左工門	彦兵衛	藤五郎	与四左工門	益野佐次右工門
備考	この年をもって当屋一巡す																	

																				明治 20
39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21		
沢井清次郎	仮名田藤左工門	な し	松田次郎助	谷口清兵衛	石田重藏	谷口庄太郎	沢井助兵衛	な し	下木豊四郎	湯瀬庄兵衛	久島平六	中村平右工門	鈴木幸平	谷口滝藏	久島平太郎	沢井惣太郎	山本太郎兵衛	上田三郎四郎	上田八左工門	
荒木栄太郎	益野栄吉	な し	荒木栄太郎	山田惣左工門	田中与四太郎	富山佐一	端井次郎右工門	な し	真田嘉十郎	伊賀庄太郎	下木吉郎左工門	益田滝藏	高柳孫左工門	高柳栄藏	大湯佐助	道具又四郎	高島彦兵衛	井上栄藏	鍛冶兵助	
日露戦争のため当屋を設けず																				因作のため当屋を設けず

明治 40	41	42	43	44	45	大正 2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
池田 与四 太郎	久島 重松	中村 儀一	松田 重左 門	田中 栄重 藏	中寺 五郎 平	北川 庄太 郎	坂名 耕吉 郎	中村 平市 郎	松木 仁左 門	森口 増太 郎	上井 勇次 郎	松村 安太 郎	松田 谷藏 郎	上田 栄寛 郎	門田 幸太 郎	池田 幸吉 郎	谷口 喜左 門	森口 多次 右門	松田 金松
松井 作太 郎	鍛冶 兵太 郎	谷口 力藏	町口 次三 郎	小沢 弥八 郎	松田 栄五 郎	田中 善五 郎	小川 宇左 門	河内 徳太 郎	式守 豊四 郎	薄守 清太 郎	鈴木 富藏 郎	中村 吉平 造	山本 儀之 平	松村 光吉 之	西村 繁吉 郎	今井 伊三 郎	益田 幸三 郎	岩尾 栄太 郎	山本 関太 郎
<p>当 屋 宿 を 曉 し て 社 務 所 に て 執 行 す</p>																			

																			昭和 2
21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
中 寺 英	下 木 正	上 井 榮 太	高 柳 善	松 田 宇	仮 名 田 哲	薬 師 次 太	久 島 榮 太	梅 田 菊 太	久 島 三	小 山 忠	北 木 義	大 門 豊	上 田 密 太	門 久	久 島 榮	上 田 榮	中 村 豊	上 井 五	松 木 平
一	治	郎	正	吉	雄	郎	郎	郎	富	藏	吉	藏	郎	六	太	吉	七	平	藏
谷 内 吉 太 郎	齊 藤 松 治	山 本 榮 藏	大 橋 友 吉	鍛 治 榮 松	大 湯 金 藏	西 順 力 一	山 田 宗 次	大 湯 利 吉	上 井 憲 一	前 田 力 藏	松 村 力 太	高 島 留 郎	山 田 小 左 工 門	大 湯 榮 一	小 沢 菊 太	真 田 嘉 祐	真 田 増 太	真 垣 榮 藏	平 野 太 作
										この年対米英宣戦布告									
										この年終戦									

																							昭和 22
41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
池田正義	北木	小嶋	上井	松田	久島	田中	久島	池田	沢井	久島	松木	門木	下木	北田	向田	松木	田中	梅田	大垣	大垣	大垣	大垣	大垣
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
夫吉雄	一松次	吉松次	一太治	一雄吉	松男	吉藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏
薄毛西	鍛山	小平	鍛真	荒山	毛高	益辻	山酒	藤真	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
利願	治田	川野	治兵	柴政	英藤	喜幸	留嘉	与平	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄	久栄
文	力一	憲幸	利兵	政英	藤喜	幸留	嘉与	平久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久	栄久
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
一勇	一郎	一郎	吉男	郎男	一吉	勇一	雄藏	郎信	一郎	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏

### 3 現在の谷内兵衛方・道閑方名簿

#### 一、剣社・谷内兵衛方

谷口喜太郎	谷口栄太	中村太平	久島あさ	北川豊二	薬師勇吉	大垣文義	松田中正	田中光一	沢井戸	中村正治	下木武雄	下木良二	池田真藏	谷口甚藏	森口吉	垣脇豊吉
上田貞太	久島栄太	松田金松	中村喜作	本田助蔵	松木平蔵	上田弥次	上田豊夫	池田正造	久島佐吉	松木久六	門寺英一	中木保治	松木多一	森口吉	北木義吉	池田与三
中村七太	高村和	松村律太	沢井清太	中村秀雄	北木庄吉	岡島義雄	石田みど	谷口政太	藤本栄吉	中倉幾野	上田菊知	宮田与四	松田宇	豆田隆吉	松田重	松田重



高 小 小 上 久 村 仮 仮 向 金 久 垣 松 久  
 柳 山 山 田 島 田 名 名 田 田 島 内 田 島  
 善 一 寛 栄 ふ た 哲 ち 義 善 郁 良

つ

良 雄 茂 英 太 さ い 雄 則 よ 門 蔵 雄 男

門 向 山 沢 田 松 田 谷 大 久 中 谷 堀 山  
 田 本 井 畠 木 中 口 門 島 寺 加 江 本  
 幸 篠 昭 信 七 外 勇 庄 義 義 欽 清 与  
 一 松 三 一 平 男 吉 平 雄 松 一 松 雪 三  
 次 郎

上 上 大 谷 松 山 谷 中 久 山 上 上  
 田 井 垣 内 田 下 加 村 島 本 田 田  
 健 栄 富 安 重 栄 栄 豊 市 与 留 英  
 太  
 治 一 造 郎 造 松 吉 七 平 郎 吉 知

益 今 益 岩 薄 井 松 田 松 松 大 大 井 毛 鈴 鈴 鈴 鈴  
 田 井 田 尾 上 井 中 村 田 湯 橋 上 利 木 木 木 木 二、愛宕社・道関方  
 三 つ 信 良 作 次 善 ヒ 正 佐 信 金 次 義 定 治 才 一  
 好 ね 英 静 男 郎 助 知 デ 信 二 二 郎 勇 雄 次 吉 郎  
 酒 益 山 山 山 益 谷 原 大 斉 真 平 石 大 大 大 松 谷  
 井 野 本 本 田 野 口 田 湯 藤 田 真 利 義 利 佐 幸 貞 良 方  
 与 貞 勝 義 時 留 文 俊 松 真 利 義 利 佐 幸 貞 良 方  
 信 二 二 一 雄 八 徹 乃 雄 治 一 男 雄 吉 吉 郎 二 一  
 山 藤 山 道 西 富 真 上 式 山 山 山 西 鍛 大 松 小 高  
 田 関 田 具 村 山 田 井 守 本 田 本 治 湯 井 沢 柳  
 憲 平 宗 つ 繁 隆 久 ス 三 利 徹 賢 平 兵 一 菊 卯  
 一 一 次 ね 行 吉 郎 ヲ 男 雄 次 治 郎 一 之 幸 郎 平  
 太 喜 次 太

前山端 鮎小谷 今鍛荒町大大田  
 田本井 谷川内井 治木口橋橋中  
 力藤次 与幸嘉為 栄英幸一貞信  
 三四

藏吉郎 松吉雄 二松一一之一一  
 真高高 端河西高松前高益鍛後  
 柴柳柳 井内願壘田田柳野治藤  
 政喜平 寛武力彦キ吉宗幸一  
 次ク 二

男一三 治雄一郎 工盛弘雄郎 緑

高高山 山高鍛薄辻中真式  
 柳橋本 本柳治口村田守  
 輝栄昭嘉重兵文留吉嘉豐  
 太 四

親藏一吉 藏郎一藏勝子郎

付録二

道閑三百年祭記念事業經過の概要

義民道閑顕彰会

本年は道閑の三百回忌にあたりますので、画期的な顕彰事業を行なうことになりました。それにつきまして、ここにその経過の概要を記録しておきたいと思っています。

寛文のむかし、七十五村の身代りとなった道閑に対する追慕の情は、今さらこと新しく述べるまでもありませんが、今回の事業が、突然に発意されたのではないということ明らかにするため、その概要を記すに先立って、ひとまず現在までの顕彰事業のあらましをふりかえってみたいと思います。ただし、藩政期のこともは、本文にも触れられたことでもありますから、故老のおもい出の中に求めうる四十余年前のあたりから記しておきます。

# 一 現在までの顕彰事業

## 1 昭和初年、墓地・刑場跡の整備。

(1) 竹矢来の組みなおし。

(2) 参道拡張、石段の附設。

(3) 桜の植樹。

(4) 附近の整地・除草。

整地・除草は、これ以後毎年男女青年団の奉仕作業をもって実施されるようになった。

## 2 昭和三十三年十二月十六日、道閑二百九十回忌。

富山市から道閑の後裔道閑健平氏を招待し、長楽寺北原広禅師の読経により、厳修され、全区民参列、しみじみとその遺徳をしのんだ。

## 3 昭和三十三年八月、鹿島町の旧蹟に指定。

この機に道標・境界杭を設置した。

右のほか、演劇を通じて道閑事件を紹介する企画も実施された。古い時代には、村芝居で道閑事件を出演するならわしもあったらしいが、終戦後はレジャー企業の発達に応じて、専門演芸人に托し、効果的に道閑の偉業を普及する方法がとられた。たとえば、昭和三十六年九月と三十八年十月とに、羽咋ヘルスセンターで道閑劇が演ぜられ、同四十年二月に、金沢観光会館と久江小学校で道閑悲話の浪曲が口演された。

この間、故老や識者から、墓地・刑場跡の拡張・整備や道閑祭の復活などについて、熱心な要望があったが、機熟さず延引していた。しかしこれは、やがて三百回忌も近いことであるから、その好機に期する、という気もちからでもあったので、その意味で、今回の事業が待たれていたわけである。

## 二 委員会の成立

### 1 昭和四十一年一月二十九日 道閑顕彰事業準備委員会開催。

久江出張所において、二百万円程度の経費で記念事業を行なうことが決議され、委員は区長一任という事になった。

### 2 同四十二年二月三日 道閑三百年祭記念事業委員会発足。

会長	山田 宗 次 (区長)		
副会長	松村 貞 二	松 木 平 蔵	
会計	松井 次 助 (のち死亡のため沢井信二)		
書記	毛利 勇		
委員	山田 宗 一 (町議会議長)	上 井 栄 一	西 願 幸 一
	山本 与四太郎	門 幸 一	小山 一 雄
			沢 井 富 雄

松田文雄	益田三好	久島平造	中寺英一
門亮一	下木正治	久島義松	沢井信一（農
協組合長）	高柳正信（消防団）	毛利敏子（婦人会）	
益田秀夫（青年団）			
顧問 益野留八	北川豊二	谷口真藏	

右の委員構成を決定、二月六日の区の定例総会に発表し、承認をうけた。

### 三 事業計画の基礎固め

1 昭和四十一年二月十二日 若林先生と懇談。

折から鹿島町史編集のため、若林喜三郎先生が芹川の泉福寺に出張中であつたので、堅田悌二先生を介して時間をいただき、会談してもらつた。委員側は山田委員長ほか四名。まず、委員長から事業の趣旨を説明、種々懇談したが、とくに道閑伝の刊行につき、左の通り決定した。

(1) 内容は、伝説と史実とをはっきり区別すること。

(2) 約百頁、千部出版で経費十五万円ぐらいとすること。

なお、墓地に建てる顕彰碑の碑文の作製を依頼、御快諾を得た。

2 同年四月二十五日 墓地附近の整備計画。

若林先生と高沢裕一先生を現地案内、いろいろと整備について御指導をうけた。御意見の主なものは左の通り。

(1) 墓の附近はなるべく現在の趣を残すようにすること。

(2) 斜面の小台地や山麓附近は小公園として整備すること。

- (3) 桜その他の樹木を植え、遠方からでも望見できるようにすること。  
 (4) 参道を整備し、明確な道標をたてること。

### 3 同年五月二十一日 総合計画樹立。

久江出張所に各委員参集、総合計画を左の通り決定した。

- (1) 道閑伝は、区民各戸・郷土出身者、その他官公庁・学校などへ配布する。  
 (2) 墓地を公園とし、顕彰碑・わらべ堂などを建立、山一帯に桜を植える。但し、現況を写真、幻灯として残すこと。  
 (3) 墓地から刑場跡へ廻遊道路をつけ、予算が許せば桜・ツツジを植え、久江の名所とする。

## 四 計画の実施

### 1 昭和四十一年五月二十五日 顕彰碑石材購入。

二十四日の現場検分に基き、山田委員長ら八名をもって石川県七尾地方事務所林務課におもむき林道補修の件を陳情、次で妙観院に道閑夫人の墓に詣で、北原広禅師に事業の趣意説明。この日、高田石材店で顕彰碑の石材を購入した。代金三十四万円、手付金四万円を支払う。

### 2 同年六月十四日 公園用地買収のため現地計測。

山田委員長ら五名に堅田先生も同行。買収予定地左の通り。

松井	幸	三五歩	益田	信英	一九・六歩
折田	久雄	五五・六歩	大門	義雄	三一・七歩
中村	太平治	五五・三歩	沢井	光一	二九・六四歩

翌十五日、益田氏の土地誤測のため、松村・毛利委員立会い再計測。



3 同年六月十九日 現地清掃

委員全員に長楽寺副住職北原裕康師・七尾農高造園科窪田武徳先生・堅田先生御同行。

(1) 墓碑移転のため説経。

(2) 公園計画につき窪田先生の御指導をうける。

4 同年七月三日 参道その他用地計測。

山田委員長ら六名に窪田先生御同行。

(1) 参道その他用地計測。

山本 賢治 畑 三坪

高柳 善良 畑 五・四坪

酒井 与信 畑 五・六坪

松井 幸 山林 三四坪

(2) 刑場跡。端井寛治 山林 二・五坪

(3) 窪田先生の御指導のもとに地ならし。

5 同年八月三日より 土工作業開始。

(1) 八月三日より十一月三日まで、久江川より石あげ作業。

(2) 八月九日より十一日まで、ブルトーザにより地ならし。

(3) 十月十八日より三十日まで、現場へ石あげ作業。

6 顕彰碑の完成。

若林先生の撰文が送られて来たので、堅田先生を介して、その揮毫を金沢大学附属中学校横西霞亭先生に依頼、高田石材店で彫らせた。その文は左の通りである。



義民道閑顕彰碑

義民道閑顕彰碑

六

寛文六年、長連頼の領地鹿島半郡で検地が行われようとしたとき、久江村の十村道閑らは百姓たちを救うために、同志をかたらって検地反対運動を展開した。

この検地には、浦野事件という複雑な政治問題がからんでいたため、藩は浦野一族を弾圧するとともに、検地に反対した道閑らをも捕えて極刑に処したのである。十村頭であった道閑の刑はもっとも重く、寛文七年十二月十六日男子三人の首をはねられたのち、はりつけに処せられた。

その後、重い租税で苦しんだ村民たちが、いたく道閑を追慕し、

おいたわしや道閑さまは七十五村の身代りに  
という白すり唄が、後世永く、この地方でうたわれた。

道閑三百回忌にあたり、その墓を整地するとともに、あらためてその義行を記念するものである。

昭和四十二年十二月十六日

義民道閑顕彰会

若林喜三郎撰

横西霞亭敬書

7 同年十一月四日より、造園作業開始。

造園については、かねがね窪田先生にその計画を依頼していたが、八月二十七日にその設計図（口絵写真参照）について御説明があった。十月三十日には角屋庭師を招いて、具体的な造園計画をたて、四日から着手した。

石材は、久江川よりひきあげたもののほかに、高畠・小金森より多くの御寄贈があった。また、十月三十、三十一の二日ばかりで、旧半郡七十五村を廻って供養石を集めた。いわゆる七十五村は、本文にも記されたように、当時の行政村五十九カ村のことで、現在では、左の六十九町区にあたる。

羽咋市 酒井町 四柳町 大町町 金丸出町 下曾祿町 鹿島路町

鹿西町 西馬場 能登部上 徳丸 能登部下 上後山 下後山 杉谷 谷内 宮地 横町 正部谷  
沢

鹿島町 曾祿 小金森 高畠 福田 藤井 小田中 久江 水白 小竹 上井田 下井田 芹川

徳前 最勝講 尾崎

鳥尾町 良川 末坂 羽坂 黒氏 一青 春木 大槻 瀬戸 花見月

七尾市 西三階町 町屋町 温井町

田鶴浜市 田鶴浜 川尻 新屋 垣吉 吉田 三引 高田 杉森 七原 白浜 大津 深見

中島町 上笠師 中笠師 下笠師 南側 筆染 奥吉田 河崎 豊田 豊田町 土川 塩津

これら六十九箇の供養石には、それぞれ町区名を記し、道閑の墓の基壇に埋めこんだのである。

なお、道閑に殉じた男子三人の供養のため建立するわらべ堂に安置する三体の地藏尊は、長楽寺より寄進していただくことになった。



わらべ堂に安置される三体地藏尊

8 昭和四十二年一月二十日 「こどもの広場」の指定をう

ける。

かねがね県に向かって、道開公園の附属施設として、「こどもの広場」の指定を申請していたが、本日付けをもって認可され、三百万円の補助をうけることにきまつた。これをもって、本公園の公共性は強くなり、一段と光彩をそえることとなったのである。

9 同年二月九日 敷地第二期買上げ。

園地造成のため、第二期買上げが決まり、本は地代の支払いが完了した。それは左の通りである。

荒木英一	同	田中 信一	同	高柳 善良	上田 俊憲	仮名田 哲雄	大橋 ハツ	山本 賢治	谷口 庄平
畑	畑	田	畑	田	田	畑	畑	畑	田
二五坪	五三坪	三三坪	一八坪	九一坪	二二坪	一〇坪	一三坪	五〇坪	六二坪

10 同年二月二十五日、「義民道閑伝」印刷開始。

道閑伝の執筆については、かねて若林先生に依頼していたが、一月下旬山田委員長ら四名先生を訪問

して、内容を検討、決定事項左の通り。

(1) 執筆方針は既定の通り。

(2) 小倉孝氏に、附録として「久氏比古神社と道閑祭」執筆を依頼。

(3) 題名を「義民道閑伝」とする。

(4) 二月中に印刷完了。

越えて、二月四日、若林・小倉両先生が最後の資料収集された。その御要望により、堅田先生および山田委員長、毛利委員はしばしば能登部の長楽寺、七尾の妙観院・本竜寺を歴訪し、道閑の遺族に関する調査を実施した。かくて、両先生によって鋭意執筆がすすめられ、二月二十五日、林印刷所に最初の原稿が渡された。

以上が、原稿締切間際までの経過概要であります。事業の進行にあたりましては、区内外の特志の方々から、物品その他の寄贈にあずかり、おおいに力付けられました。それは、あらためて、完成のあかつきに公表する予定でございますので、ここでは、ただ感謝の意を捧げるとどめたいと思います。また、長楽寺・妙観院・本竜寺には再々参上し、貴重な資料を御貸しねがいました。あわせて御礼申しあげます。

昭和四十二年四月十一日 発行

編集者 若 林 喜 三 郎

金沢市桜町八番二五号

発行者 道閑三百年記念事業委員会

石川県鹿島町久江

印刷所 林 特 殊 印 刷

金沢市長土塀三丁目四番三号

— 非 売 品 —